●相切れ候とも御斷無之間は依然發送致すべく候間爲念申添候也●

第四百六十三號目次

◎口繪
故萬國婦人矯風會々頭フランセス、エリサベス、ウイラードの肖像

◎社説
不景氣は人心の衰相のみ
逆境の感謝

◎家庭
衛生上の神經質
子孫に傳ふべき最上の寶
歐化主義再び流行せんとする歟　井華

◎講義
櫻花小史　曲浦

◎隨感
賀部祭◎斷えず後ろゝの人◎名士何によりてか老ゆる◎丈夫如何か愛す◎傳道の言論已むを得ず◎草木豈に非情ならんや◎譏らされば也

◎文藝
眞情の文字

◎兒鑑
小天使　かもめ

◎史談
無冠の女皇（ウイラード女史を評論す）　鷗村

◎雜錄
時勢と女學史
海舟翁の史談　三輪田眞佐子

◎時文
女子教育◎瓜生岩◎新小説

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
◎十日發行の分は稍や簡易實際を専にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。
◎單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるるものあらば其望に應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊	金拾錢
	半年前金	金壹圓拾錢
	一年前金	金貳圓（内國無郵税）
	代金は凡べて前金の事◎前金切れ候とも御斷無之間は引續き發送するとも可有之事	
廣告料	一行	一回（廿七字詰）前金拾錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
送金	爲替は東京本郷駒込郵便支局に宛て小爲替にすべし〇郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ふべし	

明治廿七年二月十九日内務省許可
明治三十一年四月十九日印刷
明治三十一年四月二十日發行

東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚六百六十番地
發行兼編輯者　巖本善治
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地
印刷者　島保藏
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

社告

櫻井成明譯
腓立比物語　正價金二十八錢　郵税金六錢

横山雅男著
婚姻論　正價金十二錢　郵税金四錢

若松賤子譯
小公子　正價金三十五錢　郵税金八錢

布川靜淵　故小此木秀野合著
俳諧史傳　正價金二十七錢　郵税金四錢

故鈴木弘恭述
百人一首講義　正價金二十八錢　郵税金四錢

同
文法口授　正價金十二錢　郵税金二錢

●前號（三月二十五日發行第四百六十二號）要目●

口繪＝宗教的東方問題寓意畫●宗教的東方問題＝女學校内の男性＝ウイラード女史を弔す＝工女統計＝機先論＝迫害せよ然らざれば勝負せ＝雜居後の準備＝宗教學校問題＝同志社問題＝放言問答　隨感＝則＝情死の哀を想ふ（上）＝江戸の華（二）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

（四）兒[illegible]
少年[illegible]　かしめ

（五）史談
英國の女王（ライラード女史）を評す　記村

（六）雜錄
呼びさる女學史
獨乙名家の詩　三輪田眞佐子

（七）時文
女子教育[illegible]

明治[illegible]日發行
東京[illegible]
發行兼編輯人　巖本善治
東京[illegible]町一丁目十六番地
印刷者　島田[illegible]
東京[illegible]百四十六
發行所　女學雜誌社
東京[illegible]二丁目十三番地
印刷所　[illegible]

同
文法口授
[illegible]人一首

第[illegible]號（[illegible]月[illegible]日發行）第四百六十二號
日本に於ける宗教的東方問題（論說）
東方問題と女學校内の男性（ドウイ[illegible]）
すゝむ女詩計[illegible]
[illegible]
[illegible]の家を想ふ（上）
江戸の華（二）

Frances E. Willard.

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百六拾三號

明治三十一年四月十四日發兌

社説

不景氣は人心の衰相のみ

到るところ、不景氣の歎きを聞く。人心、氣焔なく、會ふもの皆な消衰せり。其の姿を眺むれば、何となく影薄し、其の家に入りて見れば、火の消たる心地す。慷慨家の言調も自づから緩るみ、國家論の熱心も些と時勢後れの觀あり。事業振はず、人氣引立たず、物價と金利と彌よ騰がりて、生計の苦、益々迫まる。不景氣も亦た太甚しき哉。

此に於てか、前途に關はりては種々の臆測あり、之が救濟の法方に種々の立案あり。人々、耳を聳て、足を爪だてて之に掛念す、亦た痛ましき哉。

吾人惟ふに、前途の必迫は彌よ太甚しかるべし、今人の想像する如き空望は決して賴みとすべきにあらず。其の救濟の法方として一時の附景氣(奠都祭の類)は、空腹に酒を飮むが如し、醒めては一層の衰弱なるべし。滔々たる今の人の不景氣に對する覺悟にては、更に彌よ窮乏に就くの外ある可らず。自から萎靡して、而して萎靡したる救濟法に之れ由らんとす。抑も、何れの日にか能く挽回せんや。

凡そ貧乏の苦しみは、金錢の乏しきとの苦しきにあらず。金錢ある人に比較して、自から乏しきとを苦しむの苦しさにあり。故に、其の苦は錢にあらず、其の心にあり。一心覺悟の次第によりては、一錢あるも尙ほ富めりと思ふべく、百金あると尙ほ貧しきと思ふべし。景氣、不景氣を氣に病むも亦た之に同じ。

天秤棒一本を擔ぎても盛んに商賣するとを得べし。舊家の信用ありても、融通に差支へを生ずることあり。我心、振作して元氣引立たば、資本の欠乏と、融通の必迫とを憂へんや。單身裸躰のまゝ、事業界に逸出し、素手巨腕を揮って爽快に吾力

量を試みんと欲するものは、未だ曾て僥倖を期圖することあらず。若し、此の精神を以てせば、天下何の時か不景氣あらん。不景氣は即ち惰弱にして奢りに慣れたる人の心の製造する所、其の現象は唯だ人心の影に過ぎず。

假りに之を一身に喩へよ。食量減ぜしにあらず、衣服薄まりたるにあらず、家屋變化せしにあらずとするも、一心先づ萎靡すれば、五躰自から鬱し、氣血自から澱む。久しからずして、疾病あり、遂に死を招くの不幸を見る。其の因る所、異に一心の萎靡に存す。かの不景氣なるもの、起元も亦た之に類するにあらずや。論者連りに純乎たる經濟上の元因をのみ列擧して、勢ひの由て來る所を顧みず、觀察の要緊に外るる所以なり。不景氣は勢ひの生ずる所、勢ひは即はち人心の異動により生ずるところなり。古來政道の老功者、常に人心をして倦まざらしむることを主旨とせるは、此の故也。

而も、近年着々として失望の事あり。人心萎靡して振はざる亦た宜べならずや。萎靡して振はず、乃ち一世をして不景氣に沈淪せしむ、亦た何をか奇しまん。

此の故に、不景氣の挽回は、先づ人心の不景氣を除去するにあり。人心の不景氣を除去するは、之をして振作せしむるにあり。之を振作するに、一と時の附景氣により、只だ馬鹿囃の騒ぎを以て、衆相應じて頓に其の人氣を引立てんとする如きは、輕業師の投機に似たり。何ぞ久しきに續かんや。生者生者を生み、氣慨、氣慨を生む。たとひ一代万人の人氣を直ちに引立つること能はずとするも、中に衷心自から振作し、元氣勃如として禁ぜず、赫々の光明を望み、慨然として自から負ひ、奮つて敢爲猛進することを爲す若干の人あらば、則はち能く其の周圍を感動して、延ひて四方の人氣を引立つことを得べし。然るに、我も人も一樣に閉口して別に希望なく、只だ一同に騒ぎ立てゝ、景氣の火を燃やさんとする如きことにては、遂に能く誠實堅固なる振作を生ずることなし。故に知る、先づ斯の如き人物の感動あるにあらざれば、此の不景氣は決して挽回せじ。此の挽回策によりての救濟にあらざれば、不景氣の進みは彌よ太甚しからんと。嗚呼、邦家、未だ其人を起さざる乎。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

逆境の感謝

心は奢り易く、躰は慣れ易し。喉を過して熱さを忘るゝは人の常態なれば、確と心を引締めて覺悟をしても、自づと心のゆるむを人世の習ひとす。此を以て、天は冬の凛烈を下して、春の花の果敢きことを示し、世は折々の逆境を見して、人の心の圖鹵ならんとするを戒しむ。順風に帆を揚ぐるのみにては、水夫の鍛錬を得ず、國家艱難ならざれば、人民の意象を如何せん。一治一亂の循環をいざなひて、國民の精神を堅牢にす。有志は逆境を咀ふべきものにあらず。

若し世に不景氣と云ふことの折々だに無からしめば、奢りの増長、警戒の圖鹵、營業の無理、經營の淺薄など、何の日にか打撃を蒙むらん。才子何時までも飜翻として、觀兵式の大將跋扈し、常に春の花下に醉舞して、國步の艱難を思はず。斯の如くして、國民幼稚に老しなば、一朝有事の日、其の命脈を奈何せん。國家平生事なきは、事あるの不幸なり。久しく順境に狃れて、榮華に惑溺するは、國家、眞誠の悲憂にあらずや。

今ま、政府、末路逆境に瀕して、國民其の難に會ひ、困苦の聲天下に滿ちて、人心安息せず。老は寒に泣き、病は貧に泣く、其の愍狀の眞に極れりと雖も、更に大思一番せば、邦家の事豈に落心すべきものあらんや。有志之を以て奮然として立つべし、賢婦端然として之を以て家を治むべし。今の時は、勇氣あり、至誠ある眞面目の人の勝を奏すべき時、人世の寧ろ健全なる時機にあらずや。

夫れ、何如なる高樓に住居して、室にあらゆる器具を備ふるとも、人もし分に安んずることなくば、到底、滿足せじ。然れども、一朝類燒して、高樓と器具と惣べて烏有に屬せば、一枚の疊、一品の具も倘ほ結搆なる住宅とならん。乃ち知る人の滿不滿は、其の感激にあり。思を翻へして慨然として決しなば、一身五躰の外に所有する所のものは、一品と雖も倘ほ天下の至寶の如けん。奢るものは滿つることなし、愼しむものは、斷えず感謝す。其の差。物にあらずして、只だ一心の作用にあり。

故に、逆境は是れ人心を警戒して、其本來の面目を反省せしめ、直ちに其の眞情を曝露して、赤裸々に感激せしむ。人の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

正に眞面目に歸するの時也。左れば、世もし不景氣にして、生計難儀なれば、こゝに初めて處世の實際を辯知して、經營の忽諸に附しがたきを知り、僥倖の賴みがたく、投機の淺墓なるを覺りて、人生依然として眞面目なるを認たむるを得、誠勇あるもの、欣喜して滿足する所、堅實なる家風は此時にして乃ち初めて鍛煉するとを得べき也。左れは、逆境は勇氣なく誠意なきもの、恐るゝ所、不景氣は、逸を好みて勞を嫌ひ、遊惰に慣れて、勤儉を忘るゝ士人の好まざる所、故に、人生、折々此の機會を起して、衆愚に敎ふ。吾人豈、敬しみて、其の垂示を聞かざる可けんや。

家庭

衞生上の神經質

昔は、菜根を食へば百事成るべしと申して、菜葉や大根を不足に思ふは、一種の恥辱と爲たるとなるが、近年、西洋人の衞生を聞くに及んで、此の覺悟一變せり。人間の五躰八膚を解剖して、其血、其肉、其骨は云々の成分より出來上ると勘定し、之に不足を生ずれば遂には倒るべし、喩へば、煉瓦の足らざる西洋館の如く、追々間隙を生じて、自然と落入るとを免かれずと云ふ、險難至極の沙汰なり。此に於てか、六尺の男子が乳を飮み、可憐の淑女が牛を食らひ、毎度躰量をかけ、脈を視て、鏡に向つて舌を吐く三寸、ためつすがめつ其色に掛念するの爲躰、殆んど古人の想像に及ばざる所也。斯の如くして、今人は何程の健康を得たりやと言ふに、其の丈は低くゝなり、其顏は蒼くなり、髯の下に口髭ひを仕てコホン〳〵と沈んだる咳を爲し、束髮の上に氷嚢を置いて、屋上更に屋を重ね、頭の彌よ重げなる、惣じて丈夫とは見えず。衞生の進んだる効力は何處にありや。

又、今の醫者の養生法を說くや、主として、運動の事を言はざるなし。此に於てか、堂々たる男子、簷下、椽側、或ひは八疊の部屋の内にて、往來し、玆にお百度詣りの例を履みて養生乃ち可なりとするものもあり。世は追々、滑稽芝居に近づき來る。

假りに、牛乳三合、ソップ五合、鷄卵六箇、肉半斤と定めて

十分に滋養を取れ。忽まち、何事かの一と心配を生じて、衷心悶々として氣に病むとの出で來なば、滋養の量は、昨日に異ならず、運動のつとめも廢せしにあらねど、直ちに肉落ち、顏やせて、驚く斗りの衰弱を呈すらん。之れ何の故ぞ。他なし。氣に病み、心屈して、精神の引立たざる所あれば、玉の躰を組織すべき滋養十分の量に供ふることとも、詮なし。元氣活潑、これ百の滋養の根本なれば也。

蓋し、人の元氣は、一身の生命の如し。活動の基茲にあり、健康の土台、こゝにあり。元氣、熾んなる時は、血の運行亘く、百躰の器關爽かに運轉し、爪の先き、髮の毛の末に至るまで、イキ〳〵として滯りなし。一身の滋養、之に過ぎたるは無き事なり。然るに、なまじひに衛生上の理想を聞きかぢりて、人の躰の成分を計算し、云々の滋養なければ、生きて居られぬかの如く心配すれば、活機第一の元氣と云ふものは既でに衰へ、我身と餘計の苦勞をして、獨り無益の衰弱を招く。衛生熱心の上流者が反つて屢ば病ひに罹るは此の故なり。人は何時間眠り、何十目の肉を食ひ、何百歩の運動を為ざれば、衛生の道理に適はずなどと言ふものはあれど、抑も其の道理は何事より割出したる乎。死にたる人の躰を解剖し、元氣をヌキにしたる肉躰一邊の觀察を以て、活潑の生ける人躰の規則となさんとす、馬鹿正直も亦た太甚しからずや。繁忙の男子は申すに及ばず、田舍の大家などにて、下男下女の奉公人あまた召仕ふ主婦などが、人は八時間眠らねば健康に害ありなど云ふ緩漫極まる覺悟にて立ち行くべきや。三四十日、一睡もせで大事を決せし人もあり。日々夜々の事に、ウトロ〳〵として眠り、八時間が規則なればと言ふなど、惰弱も亦た極まれり。肉何十目が必らずしも人の躰に必要ならば、肉を食はぬ人は夙にも死すべかりし也。肉食一切を禁じ、粗末なる薄粥に餓を凌ぎ乍ら、滿腹是れ精神の禪僧が、肥大福々たるに、かの肉食錦衣の徒、煩惱を拂ひかね、蹌々踉々として來つて安心を要むるの哀れを見よ。肉食、これ人の活機に最も大切なるもの乎。惣じて、衛生を氣にして、食ふと、寢るとなどに、滋養々々と言ふは、既に一種の病ひと心得、健康にして活潑なる人士は、一切此等の掛念を忘るゝを可とす。たとひ、滋養ある食物にても、之を滋養物なりとして食すれば、藥と同じものとなる、其味はひは無きとにて、味はひな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

き滋養物を滋養に必要ゆゑと杞憂して食するの利益は、滋養く〳〵々々と心配して我より氣を屈するの損失と、差引きて帳消しとなるべし。滋養と思ひて食するは、食物の法にあらず、須からく其の味はひを第一とすべし。味はひを賞美して、舌鼓みして食ふに至れば、其の結果として何ものも滋養となるべし。滋養として食すれば、美味の品も藥同樣、苦きものにて、つまりは滋養ともなる可らず。機一轉の元は苦勞にするとせざるとの故にて、詮ずる所、元氣を振ふと振はざるとの相違より來る。

左れば、余りに衞生に苦慮するは賞むべきとにあらず。之を苦慮するは、主婦一人、もしくは、主人一人の心の中の才覺となし、一家の風としては衞生にくよ〳〵する杞憂を全く取除き、味よきものを賞美して食ひ、家のキマリとして寢起を一定し、家庭團欒の結果、人心欣舞して、雀躍するやうにすれば、運動も入らぬとなり、但だ滿足して働けば則はち玆に最上の運動はありと心得べし。

夫れ、何事にも神經質と云ふがあり。宗教上にも、道德上にもあり。衞生上の神經質こそ、就中、氣の毒なれ。宗教道德に無意識を尊ぶ如く、衞生には、我身を忘るゝほどを上とし、種々の生理論は、學問の上の研究と見做して、實地には杞憂せざる等にて、例へば、信仰に學を要せず、忠孝に倫理の記臆を無用とするに同じきと也。然るに、今時の弊、何事にも、無益の穿鑿に屈托し、徒らに分析解剖を好んで、我自から大躰の安心を毀つ、眞に詮なきと也。衞生に氣苦勞して衞生を害するなど、殆んど白痴の所爲に似たり。

子孫に傳ふべき最上の寶

井華

凡そ富を重ね、寶を貯へて、子孫安樂の爲に之を遺さんとを冀ふは、人の常なり。されど家に万卷の書を貯ふるも、子孫之を讀むものなくんば、徒らに紙魚の好餌となり了るに等しく、假令遺產億兆ありと雖も、後繼、之を理するの法を知らすんば、富は却つて彼等を禍ひし、寶は無乃彼等を賊ひて、彼等は人の道に由るを能くせず、沈淪墮落の無用者とならんのみ。さらば、書を遺さんよりも、之を讀むの道を敎へ、財

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を傳んよりも、之を埋むるの法を授くるは、即ち賢き遺產ならずや。神の人は、地に貯ふる財と、天に貯ふる財との二つを區別せり。地なるものは朽ちん、されど天なるものは滅ぶることなし。然れども凡人比々皆、朽つべき地の財を子孫の爲に遺さんことを計つて、天の財に思ひ至らず。それ子孫に遺して、まことに彼等を幸すべきものは、天に貯ふるの財なり。智者は皆之をなす。然らばその天財とは何ぞや。

于公は、吾子孫よりして大臣を出すべしとて、宏大なる門を建て、また某は庭前に三槐樹を植ゑて、子孫三公の位に登るものあるべしと誓ひしが、二人の者の預望は、いづれも達せられて、子孫は、家門の譽を擧げたりといふ故事あり。抑も高門、三槐、豈に大臣三公と何の關りかあらんや。もし彼を營み、之を栽うるによりて、子孫高位に登るべしとならば、この最易の事、これを眞似ざるが愚なり。さりながら、彼二人は、自ら大臣三公の位に登り得べき力量智德あつて。而して敢て己に此榮譽を收めんとせず、德望既に一鄕にあまねくして、更に德を積で怠らず、美名遂に一天下に傳はるもなほ草廬を出です、家に幾許の富ありしや否や、之れを問ふことを要せず、この德望美名を畜積したる宏大なる富を子孫に傳へしによりて、子孫また父祖の行に勵まされて、更に此富を增殖し、遂に時到り機滿ちて、位人臣の極に達するものを出したるなり。この大いなる富、これぞ天に貯はふる財の好例ならずや。

淸和源氏の一門には、名將賴義義家の如きあり、彼等もし一たび、手に唾して起たば、關八州の覇業、必ずしも賴朝を俟たざりしならん。されど彼二人は、敢て此擧に出でず、忠を王家に盡し、卑位に安んじ、藤氏の下に屈して而して關東の人心を源家に收攬したり。これぞ實に源氏の爲めに、天下の財貨を貯へたるよりも、なほ價ある富にして、之ありて初めて賴朝の覇業は成り、また鎌倉源氏の亡びし後にも、足利新田は、源氏の流と稱し、德川氏すらも、源氏の長者の名を榮として、關東に起りたり、即ち知るべし、賴義、義家等の積み重ねて、以て子孫に遺したる積德の寶の、如何に莫大なるかを。彼等は實に朽ちざるの財を天に貯へて子孫に遺したるものに非ずや。北條氏の如きも亦た然り、倍臣國命を執りしより、朝廷の臣下などは、兎角に非難をなしたれども、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

素より其爲す處に、多くの罪過ありたりと雖も、九代の間、天下を制御し、而して高時の暴戾驕傲にして、遂に一門の滅亡を招きて、身もまた亡ぶるに至りたるも、東勝寺に主に從つて殉死したるもの凡そ六千八百餘人を算したりといひ、また王政に復したる後も、朝家の治をあやまるや、天下の士民皆な北條氏を思ひしといひ、加之、伊勢平九郎が、後北條と稱して、小田原に據りて、關東の人望を收めたるとなどを考ふれば、時政以後泰時時賴に至るまでの間は素より、時政以前に於ても、北條氏なるものゝ爲に、領地食祿の以外に、大に天に財を貯へ置きたるものならずんばあらず。

南洲先生が、吾家の家法は、子孫の爲に美田を買はざるに在りと詠じたるが、西鄉氏の祖先は、子孫の爲に美田を遺すの必要を見ずして、德を積んで、これを後代に遺したるは、即ち、南洲氏の如き、偉人物を世に生むとゝなりたるなり。吾人は、深く感ず、英雄偉人は、其人一代に出來上るべきものに非ずして、恰も無數の細流合して、洋々たる江河を成すが如くに、祖先の代々に積みたる德の寶の、適當なる子孫の世に及んで、其の光を輝かすものなることを。俄分限者、一代身上といふもの、金錢または爵祿の上にはあり得べきも、人物なるものに至りては、毫も祖先の遺傳に由ることなくして、而して起つものあるは甚だ稀なり。家門の系圖歷史が、子孫を鼓舞する所以のものも、亦た、偉大なる祖先の、後裔を動かすに足るべき德を積んで、一家の至寶とし傳へたるものゝ、子々孫々の血脉中に、脉々として流動するを以てなり。動植物に遺傳なるもののあるとは、今日にては爭ふべからざる眞理となれり。其遺傳の法は最近の學說の說くが如くに、兩性の細胞相合して生殖を營むに當り、先に左右より合したるもの、此度は上下に分裂して、二つの新細胞となるの際、細胞核中に在りて遺傳を掌れる星光形狀質の、分裂の工合によりて、一見、父母の性質を幾分づゝ遺傳するとゝなるといふもの果して眞乎、或はまた他に不可思議の力ありて致す處なるか。その何れなるやを識らずと雖も、父母の善惡美醜は、子孫に遺傳せずして一代にして滅するものに非ず。もし父母の善行の遺傳、明白に知り難しとすれば、今爰に惡行の遺傳の恐るべき一例を示さん。某といへる屢々盜を行つて多年獄裡に投ぜられしものあり。此者一朝基督敎を聽いて、翻然と

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

して、其罪を悔い、赦されて後、正業に就き、良家の女を娶りて、設けし第一子は男兒なり。この男兒本年七八歳ばかり然るに不思議にも、他の良家の兒とは異なり、食は美味なるよりも多量なるに就き、食ふて飽く事を知らず、途に落ちたる梨また柿の皮をも拾つて之を食ふとあり、其喜ぶ處はまた卑野なる事柄なりといふ。この傾向より判ずれば、彼は即ち乞食盜賊等の甜むべき艱苦を意にせざるやう誂へ向に出來たるなり。其父が其罪を悔い改めたる後にして、なほ此異樣の子あり、惡性の遺傳、豈に恐れざるべけんや。而して惡性の遺傳すると如斯しとすれば、善性の遺傳するとも、また等しき度合にあらざるとなし。善因善果といひ、積善の家餘慶ありといふもの、人一代の約束たるのみならす、また形あるもの丶みに拘るに非ず、子孫の世に善性の遺傳となりて、而して發揮するの義を含めり。

凡そ億兆の財産、公侯の爵祿の如き、これを子孫に傳ふるに於ても、子孫愚ならば、父祖の五十年百年にして成し上げたるものも、一年二年にして、忽ち破り盡して、社會の厄介者となるは有勝ちの事なり。富貴に淫するの家には、父祖の業を續ぐと能はざるの愚者を生ずるは、一般の事實にして、此頃、此種の痛ましき事實を耳にすると極めて少からす。これ單に子の罪にのみ由るに非らす、父祖の子孫の爲めに計るに其道を誤りたるの責甚だ大なり。然れども、德を積んで、之を子孫に遺すものは、假令家に擔石の資なしと雖も、彼等は世に無事平安なるを得て、また家を起し、名を擧ぐるも難しとせず。王侯將相種なしといふは非なり、彼等は父祖が蒔きたる種より生り出づるものならずんばあらず。將門將を出すは、父母德を積み、子之を紹ぐを以、の故による。大人物の祖先には、必ずや偉大の資を有して、天下、國家に多少の事業をなしたるものあり、且また隱れて知られざるも、賢明なる婦人の、家門の血統を清潔高尙ならしめたるものなくんばあらず。

嗚呼滔々たる天下の父母、財を畜へて、これを子孫に遺さんとするは、誠に人間の情性の趨く處にして、素より不可なしと雖も、何んすれぞこの情性を推し進めて、德を積んで、これを後代に遺すとをなさゞるべけんや。己が死後の爲に生命保險に加入して、金を積むは可なり、されど更に志を大に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

して、家門万代の保險の爲に、德を畜へざるべけんや。地に貯ふるの財は、實に頼み難し、天に財を貯ふれば、子々孫々容易く之を蕩盡するものに非ず。嗚呼天下の父母よ、祖先既に家門の爲に德を積んで、己の代に及べりとすれば、徒らに名に奔り、利に狂して、彼廣大なる賜を傷くるは、甚だ痛むべきの事ならずや。未だこの賜を傳へらるゝと薄しと感ずれば、則ち自らこれを饒にして、後代に遺すことをなせ。我が智德才力、既に天下に事を成すに足れりと信じて、而して坎坷不遇に處するの士人、冀くは漫に憂憤を起して、身を傷ひ、家を破るの至愚をなすこと勿れ、高門を建て、三槐を栽うるの高志を起して、德を積んで、子孫の繁盛の爲に計るべし。殊に母たり、妻たる婦人は、實にこの至寶を、後裔に傳ふることを以て、最大の責任とせるに於て、何ぞ、警戒して以てこの任に從はざるべけんや。天下に寶は多し、されど子孫に傳ふべきの最上の寶は、彼宏大至重なる積德の賜の外、また何か有らんや。

歐化主義再び流行せんとする乎

社會の事物は、凡そ十年にして、一廻轉するものとか聞くは實に其理あるが如し。此頃はまた往年歐化主義に熱中し給ひし相公達の上に在すこと、內地雜居といふ大事件の明年に迫り來れるなどにて、種々の物事、これよりして、西洋風を尊ぶやうになりて、今を距る十年余則ち明治二十年以前の歐化主義の流行を、或度合まで繰り返すにてはなきやと思はるゝなり。既に先日は、伊藤侯爵令息の結婚披露式とかにて、十年程も打ち絶えて無かりし舞踏會の再興せらるゝあり、往年は第一流の西洋主義家にして、其後は國粹を喜ぶやう反動せる某々博士等は、絶えて久しき羅馬字會を復活さするとかいひ、大臣高等官の連中にてロンテニス倶樂部を起すなど、社交上の傾向、何となく西洋臭くなりかけたり、これは、內地雜居準備といふ呼聲の影響する處なるべし、女子敎育の奬勵などいふことも、またこれが爲めとか。國家主義家、日本主義家などか、躍起となりても、この狀態か勢力を增すの日には、其向ふを張つてこれを遮る事はならず、自分もまた其大

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

勢の中に引き込まるべし。今日の國家國粹などいふ人々の中には、前年の非常の歐化熱心家も尠なからず、彼等は大方は時世の風向を見て動くものなれば、今後の樣子次第にて、またも昔の西洋心醉家になるとなしともいへず。

人は時世に驅られて事をなす折には、一般に其爲す事に夢中になつて、後より考ふれば、馬鹿らしき事をも、道理をつけて、尤に思ひて、弊害の甚だしくなるまで盲進するものなり西洋の空氣の入り初めて當時には明六社の先生達の中には、男女同權の故によりて、女子もまた頭髮を斬りて、結髮の苦を免れしむべしなど論じたる人もあり、この可笑しき議論も當時には眞面目に考へて、また成程と聞えしならん。歐化主義が以後流行するとなるとすれば、どの弊處に陷るまで進みて、また如何に烈しき反動を來すとやらんと、實に氣づかはしきなり。世人がみな先年の如くに、乘氣になり、社會の狀態に變化を來たすとすれば、家庭もまた尠からぬ影響を蒙るとなるべし。先年の歐化主義流行の時代には珍奇なる出來事の多かりしが、其中にも家庭に關するものにては實に左の如き事さへありたるなり。

●貴婦人某々等毎月三回上野精養軒に會して、西洋料理の飲食法を研究す。（明治十八年八月）

●貴婦人方に手飾の無きを遺憾として、爲に計畫するものあり。（同年九月）

●既に舞踏會あり、然れば亦夫人乘馬會なかるべからずとしてこれが計畫をなすものあり。（同上）

●福岡に婦人同伴會あり、夫妻手を携へて宴會に望む。（十九年一月）

●東京に女子交際會起る。（同年四月）

●横濱に婦人交際會起り、福澤諭吉氏男女交際論をなす。（同年五月）

●伊藤博文陸奧宗光等府下に一大女學校を起して純然たる洋風婦人を養成せんとす。（同年六月）

●婦人用の帽子賣捌けよし。（同年十一月）

●海軍々醫の妻女姉妹等毎月三回相會して洋食會を開く。（同年十二月）

●京都府知事、自今婦女は剃眉涅齒するとを廢し、結髮を過緊ならざらしめ、且數々毛髮を洗滌すべしと訓令す。（同上）

●京都府知事曩に女風改良の諭達をなせし以來、新平民の婦女に至るまで、束髮を結ぶ。（二十年二月）

●愛媛縣廳の判任官以上の妻娘とも自今洋服を着するとの協議をなす。（同年三月）

●府下の洋服店男子の洋服よりも却て女子の洋服の方多くの注文を受け、柳原の古洋服店、女洋服の釣り下れるを見る。（同上）

●地方官諮問會のため上京せる各府縣知事は、孰れも夫人を同伴す。此際知事夫人同伴懇親會を開かんとするものあり。（同上）

●大坂婦人社會に乘馬流行し始む。（同上）

●仙臺軍營の將校の妻女は、米國教師を聘して英語を修め、洋食調理法を學ぶ。（同上）

●高等女學校の教員及び帝國大學教授諸氏發意にて、和樂會なるものを設く、目的は會話舞踏音樂等を以て、普其なる男女交際をなすに在り。先是某々貴顯等發企して、高等女學校生徒と帝國大學生徒とを會して舞踏會を開んとしたるとあり。（同年四月）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●東京高等女學校は裁縫の一科を除くの外、家政教育は、悉く西洋風をなす。(同年七月)

●貴紳の夫人令孃は是迄舞踏にのみ熱心なりしが、此頃婦人乘馬論を主唱ものあり。各自邸に馬場を設くるか、或は共同して一大稽古場を開かんと相談中。(同年八月)

●貴顯數名婦人乘馬短銃練習會なるものを設けんとて周旋す。(同年十月)

●東京麻布英和學校教師ラーヂ、男女學生を集めて、交際法を教授す。(同年十二月)

以上はたゞに數例を擧げたるに過ぎず。讀者之によりて當時如何に家庭の動搖せしかを思ひ起すべし。概するに女子の洋服盛んに流行し、夫妻の同伴は珍らしからず、爲に相乘車も流行し、英語は盛んに行はれ、婦人會は到る處に開かれ、女學校また多く起れり。中等社會以下の妻女にして眉を立て、おはぐろを落したるも、實に此時よりの事なり。西洋流なると、彼の如く極端に馳せしといへども、當時に在りては、人敢て之を怪まざりき。當年には以上の如き珍奇の出來事の類多かりしとも、今や多くの人々は之を忘れ、其際、此等の主動者たりし先生方も、頓と忘れて仕舞ひたるが如し。健忘なる先生方は、今後また歐化主義に熱中して而して往年の覆轍を踏まぬとも限られず。敢て歐化主義を非難するにはあらねども、輕卒なる士女が、其表面にのみ沈醉して、弊害を醸すこと前年の如くならんことは、實に恐るゝ處なり。人は既に往年自らなしたるの珍事奇行を忘れたり。由りて、以上の數例を擧げて、歐化主義或は再流行せんかの懸念あるの今時また將來を戒む。殊に、家庭には進歩あるべしとはいへども、賴みがたき社會の變動の風潮の爲に、侵擊せられて、其平和を害はるゝことなからんやう、謹むべきなり。

講義

櫻花小史

曲浦

去年四月十日發行本誌第四百三十九號に『櫻蔭懷古』一篇を掲げたるが、今年も此は、敷しまの大日本の國は、花咲く春となりて、いろ／＼の事思ひ出す櫻に、昔を繰返して、爰にまた『櫻花小史』をものし、以て『懷古』に續ぐとしかいふ。

◎櫻は我國特有の美觀にして、他邦またこれ有ることなし。支

那にも亦これありや否やといふ說あれど、彼國のけ、櫻桃といひて、花を賞せず、實を食ふものにして、元來同科の植物なれども、類を異にせり。櫻桃は蓋し西洋のチエリーと同種なるべきか。我國にては、もと〳〵櫻桃の櫻字を假りて、サクラの語に當て嵌めたるなり。櫻なるものは、元來山野に自生するものにして、人の其美花を賞翫するに至りて、彼處此處に移し植ゑられ、又本來は一重にて彼岸櫻のやうなるものなりしが、人爲淘汰によりて、樣々の變種を生じたるなるべし。

◎吉野山は、一目千本といふばかり、櫻樹多きは、此山元來自生のもの多かりしを人に知られて、人これを保護し、また移し植ゑたるもありて、繁茂を致せしならん。吉野以外にも無名の櫻花地なり、濃州の鎌が谷は滿目櫻樹なれども、地僻陬なるを以て、人久しく之を知らず、翫賞の客爰に杖を曳くに至りしは、僅に百年以前位よりの年なりと。また信州安曇郡のダバシチ山といふは、全山みな櫻にして、西行法師も、一たび之を過ぎりて、

聞きもせずたばしね山のさくらばな
　吉野の外もかゝるべしとは

と讀みたりと傳へ、吉野に優るの絕景なりとかいふ。されど此地、人知る稀に、かゝる好景果して今に存するや否やも定かならざるこそ遺憾なれ。紀州那賀郡根來山も櫻花數千株ありといへども、地幽邃にして人訪はず。櫻花もと自生す、されば人の聞き及ばざる深山がくれに、春は雲と靉き、雪と散り、自ら景を盡して、自ら之を樂しみ、たゞをり〳〵、樵夫の眞柴に折りそへられて、人里に出で、あるは無情の斧にかゝりて、あたら、名木の、賤が朝な夕なの、飯かしぐ料となるのみなるは、必ずや多からん。

◎北海道にも隨處山中に自生の櫻あり、アイヌ人は之を稱してカリンハといふとぞ。琉球にも亦之れありと。さらば、我邦、北より南に至るまで、春は櫻の咲かぬ里もなく、實や八洲の内は、花に春來るとやいはん。新領地を日本化せんとならば、これに盛んに吉野、櫻川の櫻を移さんはいかに。伊豆大島、八丈島の櫻は實大にして食用に適すと又朝鮮にも櫻ありといふ說あり。

◎抑も櫻の目出度き事は、實に本居の翁が敷島の大和心をば、朝日に匂ふ山櫻花にたぐへし如く、いみじくも日本の人の氣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

質を顯はして、咲くに美はしく、散るに潔きは、武夫の心に叶へれば、其愛でらるゝもうべなりや。我國古今に通じて西行法師ばかり、櫻を愛せし人は稀れなり。法師は、山また山の奥の奥までも、櫻の故に、枝折りだにせで分け入りて、花散る路に迷はんとをさへも希ひ、而め、これをば禪味をきゝ分くるのよき便りとせし事、佛祖が蓮華を拈りて、迦葉と消息を通ぜし程の趣きもあり。此人は捨身の世にも、なほ武士の昔の志もて、此花を愛したるが上に、佛法の教に從ひて盛者必衰の理りをも學びけん。沙羅双樹の花の色とは如何なるものやらん、え知らねども、櫻のうつろひ易きと彼に似たれば、僧侶沙門の、之に心を寄するもむべなり、釋尊が如月十五日に沙羅双樹の陰に入滅したりけるをゆかしみて、西行も亦た、

　願はくは花の下にて春死なん
　　そのきさらぎの望月のころ

とこそは詠ぜしなれ。

◎扨て我朝はいつの時よりしてか、人々櫻を愛づるに至りしや。神代の事は知るべからず、木花咲耶姫をば、櫻の女神として、多くの社に、齋き祀れども、木の花とは、大昔は專ら梅をいへりしにて、現に王仁の仁德帝に奉りし歌にても徵せられ、古今集時代に至りてすら、單に花といひて、即ち梅の事にも用ゐしを見れば、此姬は即ち梅の女神なりと申すべきか。愛櫻の事跡、國史に見え初めたるは、彼仁德の次の帝、人皇十七代履仲天皇の御世なり。日本紀に記す、帝かつて、冬日、船を大和の磐余都市磯池に泛べて、宴を設け、膳余磯酒を獻ぜしに、櫻花一片飛んで帝の盞中に落つ。帝之を異しみ、物部長眞膽を召して、花の在る處を覓めしめにしに、之を掖上室山に獲たれば、帝大に悦び、磐余の皇宮を名けて磐余稚櫻宮と稱し、此日物部の姓を改めて稚櫻部造といひ膳の姓を改めて稚櫻部臣といひしとぞ。また人皇十九代允恭帝櫻花を賞して和歌を詠ぜしと紀に見ゆ。されど當時の人は、櫻の華麗なるを愛するよりも、むしろ梅の隱逸なるを好みたるが如し。志かるに、平安朝以後、太平打つゞき、人々文弱の氣質に流るゝに至りて、彼隱逸なるよりも、此華麗なるが、心にかなふやうになりて、愛づるも盛んになりもてゆき、百敷の大宮人は、暇あれや、昨日も今日も、櫻かざして

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遊び暮らしつ、花といへば即ち梅ならで、櫻を指すとなりにき。詩歌の想の變遷は、よく人心の遷移を示すとせば、實にや、古今以前は梅の姿なり、其以後は櫻の態なり。されば櫻、はじめは、大宮人の如きによりて、其華麗なるを以て愛せられ、延いては、武夫によりて、其潔きを喜ばれ、厭世の人には無常の理を諭す。而して西行の如きは、いたく之を愛するによりて、春は櫻花の福音を、昔も今も四方に傳へ、あるは、また、

櫻花をにもやまにも植ゑおかん
見ぬ世の春を人やしのぶと

とよみたりける某の如きありて、遂に後世の春は花に來去するとなりぬ。

◎天徳年中（村上天皇御宇）皇宮火く、南殿の梅樹また災に罹る。よりて式部卿重明親王に命じて、其跡に櫻を栽ゑしむ。こゝに至りては左近の梅の名さへ滅んで、左近の櫻、其名を專らにせり。蓋し此事以て當時既に人心の梅の愛をうつして櫻に加へしを知らるべきなり。彼親王はいたく櫻を愛して、吉野より移して、夥しく其第に植ゑたりき。彼菅原文時が

誰謂水無心濃艶臨兮波變色 誰謂花不語輕漾激兮影動唇

といひしは、此帝の嘗て櫻花の宴を設けて、群臣をして詩を賦せしめし時、其序として作りたるものなり。

◎紀貫之はいたく櫻を愛して、万里小路の第に多く之を植ゑしにより、時人、其あたりを呼んで櫻町といひしとぞ。彼小督の局の父、重範卿の櫻町中納言と稱せられしも、甚だ櫻を愛して、神に祈りて、花をして久しく散らざらしめたるとなどあるよりして名づけられしなり。

◎天武帝、壬申の亂に、吉野より伊賀に走る途中、石上に憩ふ。其處古櫻あり、落花、帝の鎧を點綴して、恰も白糸にて縅せるが如し。帝即位の後、白絲縅の鎧を製し、名けて小櫻といふ。小櫻縅の鎧、爰に始まる。

◎平忠度、身は西海の藻屑と消えしも、行くれての歌、並にさゝなみやの歌に、櫻を愛せしやさ心を世々の末にも知られ、龜山上皇は嵯峨の仙洞に宸居ましまして、嵐山に吉野の櫻を植ゑて、これを都の吉野と稱し、

春ごとに思ひやられし三吉野の
花は今日こそ宿にさきけれ

の御製あり。後醍醐帝、吉野の行宮に憂き身となりて花を覽るとを嘆じ、帝崩ずるや、近臣栗田久盛悲しみに堪へず、櫻一千株を栽えて、遺迹を表せり。後龜山帝はまたおなじき假宮にありて、

治まらぬ世の人事のしげければ
さくらかざしてくらす日もなし

と詠まれけるはいと哀れなり。如今、吉野山、落花深き處に誰か南朝を説く。

◎足利高經、嘗て諸將を義詮第に招き花を觀る。佐々木高氏なるもの、高經と隙あり、よりて招きに應ぜず、自ら大原野に赴いて盛に賞花の宴を張り、大銅瓶を大櫻樹四株の下に置きて、挿花と見立てたり。今川義元、櫻を駿河に植ゑ、吉野に擬して千本櫻といへり。文祿年中、豐太閤花を吉野に觀るに、從者數万人、觀極つて歸る。其後秀吉吉野花見の謠曲を作らしむ。加藤清正、肥後に歸り、太閤祠を龍田の祠前に營み、櫻樹を列植せしが、此處今日までも觀櫻の名處となれり。八丈島浮田秀家の墓側に老櫻あり、春來る毎に盛衰轉變の理を告ぐと。

◎櫻の名處は、全國にいと多けれど、人は先づ吉野をいひ、初瀨嵐山これにつぐ。東國には、常陸の櫻川名高かりしがいまは如何にや。京都は、地味頗る櫻に適せりと思しく、祇園清水など今盛りなるらん。祇園は往古は櫻樹頗る多かりしもいまは其數いたく減ぜり。此外智恩院、圓山公園、靈山、若王寺、吉田山、双林寺、平野神社の夜櫻、鞍馬山、神泉苑、仁和寺、廣澤、雲林院、小鹽みな春の錦を織る。東京にての名處は上野、隅田堤、御殿山、飛鳥山、小金井等をはじめ賞客杖を曳く處には、なほ愛宕、芝、淺草、九段の四公園、日枝神社、日比谷大神宮前、音羽護國寺、日暮里花見寺、本所堤後園、江戸川、小石川植物園等あり。

◎隅田堤は深堀橋に始まり熊谷に至る里程十六里計、天正二年小田原の北條氏の築きし處といふ。德川氏に至りて、三圍稻荷の邊より木母寺の際まで、堤の左右へ、桃櫻柳の三樹を植ゑたり。小金井堤の櫻樹は享保年間(或云元文二年)郡官川崎某(伊奈某ともいふ)台命を奉じて、吉野山及び常陸櫻川より櫻の苗二万餘株を植ゑしが、後其數年々に減じたり。御殿山はもと太田道灌の館の在りしところといふ。舊幕時代には東都有數の名所

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

なりしが、維新の際、英公使館を此處に置きたると、同館の火けたるなどにて、櫻樹の數を減じ、また品川の七砲臺を築くに、此山の土を堀り毀ちたるが爲に廣袤を減じたり。されば、老樹といふもの殆どあるとなし。且つ此地今は山尾子爵の私有に歸して、昨年以來公衆の出入を許さず名處遂に滅びぬ。

◎堤防に櫻を植うるは、根を張らすと、人を多く招くとにて、地を固むるの効あり。またこの空地を飾りて、公園地となすの趣意にも出でたるならん。此花また水を清くするとの言傳へあるより、下には玉川上水を流せる小金井堤にこれを栽ゑしものとか。

◎櫻の名花とて古へより名高きもの諸國に在り。其中には今日は既に枯れ果てたるもあるべけれども、なほ其ゆかしの名をのみ留めん。陸奥の都々古山の月夜見櫻は、大織冠鎌足の和歌に名をあらはし、常陸太田郷の旌櫻は、八幡公東征凱旋の節旌竿を此處に挿し置きたるが芽を出して成長したるものと言ひ傳へ、花心には旌に似たる小片あり。大和興福寺の千葉櫻は、上東門院嘗て命じて其樹を上らしめんと志たるに、僧徒大に怒つて、死すとも此花を上らじと争ひしを、門院聞て、感嘆し、乃ち伊賀余野莊を樹の料に寄せ、花時は使を遣して之を守らしめたり。其莊を花垣莊といひしとぞ。下總大山村香取祠の古櫻は平將門第四子の手植なりといひ、東京澁谷八幡の金王櫻は、義朝の臣金王丸が、主の館の櫻を拜領して移し植ゑたるものといひ、紀州野中村に秀衡母櫻、富士裾野賴朝營趾の下馬櫻、伊勢石藥師牛若丸鞭櫻、下野々澤の靜御前手植の靜櫻、陸奥磐井郡辨慶手植の辨慶櫻。伊豫山越の十六日櫻、攝津疣水の井保櫻、長崎櫻谷寺の日見櫻、河內弘川寺の規櫻、此櫻は楠氏の臣隅屋與市の舊壘に在り、與市嘗て此の樹を以て盾となし、戰もし利あらざれば、此樹陰に死せんと誓ひしものと傳へ、會津伊佐須美神社の薄墨櫻、辨慶が伐一枝可截一指と制札を立てたりといふ須磨寺の櫻、後醍醐帝が鳳輦を返したる住吉神社の車返櫻、山城大井川北なる小督櫻、秋色女が

　井戸はたの櫻あぶなし酒の醉

と詠みたる上野公園清水堂傍の秋色櫻、播磨赤穗の大石良雄手栽の大石櫻、丹後宮津の和泉式部が夫保昌の狩場に栽ゑた

る狩場櫻、廣島の推古櫻、香川景樹が

　大空のいろの淺黄にさく花を
　　霞の袖のうらかとぞ見し

と詠みし、京都智恩院の淺黄櫻、祇園の糸櫻、深草の墨染櫻いづれも名高し。

◎此外西行櫻といふもの、京都に三樹あり。双林寺なる西行遺愛のもの、小鹽山勝持寺にて西行法師が

　花見にとむれつゝ人の來る時は
　　あたら櫻のとがにぞありける

と讀みてより西行櫻の名を得しものは、今は枯槁して跡なし。此寺昔は花の寺とさへ呼ばれしが、今は僅に形ばかり殘せり。嵯峨法輪寺の一本は、謠曲の「西行櫻」に謠はる。

◎豐太閤双林寺の櫻を愛して、花の制札を前田玄以に書かせて、之を住僧に與へたり、其辭に曰く、

　當寺山林竹木不レ可ニ伐採一
　次花折取事堅令ニ停止一之畢仍如レ件
　　天正十四年三月五日　　民部卿法師玄以花押

◎櫻に關する謠曲には、嵐山、櫻川、小鹽、西行櫻、雲林院、墨染櫻、熊野等あり。熊野にも見えたる地主權現の櫻は、其角これを吟じて

　京中へ地主の櫻やとぶ小蝶

といへり。仁和寺の櫻は身幹甚だ短くして株々根邊より花を着け、万枝曲折して地上を蔽ひ、他に比類なきものなり。河内國なる楠氏の臣恩地左近の家側の九本櫻といふは、一株にして九幹に分るゝとぞ。

◎松岡玄達の櫻品に載せたる、櫻の種類には熊谷櫻（八重の彼岸櫻にして、櫻花中最も早く開くもの、熊谷直實一の谷に先登したるより、其魁の意味にて名けしものならん。）彼岸櫻、小櫻、糸櫻、婆櫻、不斷櫻（伊與山越十六日櫻はこれなり。）山櫻、兒櫻、芝山櫻（一名鷲尾）さかて櫻、伊勢櫻、金龍寺、眞櫻、桐谷（一名車廻し）江戸櫻、法輪寺櫻、江戸法輪寺（法善寺泰山府君ともいふ）殿櫻、普賢像、鹽竈、太山府君、揚貴妃、有明櫻、絲くゝり、大提灯、緋櫻、樓間、虎尾、大山木、蓮、香櫻、犬櫻、樺櫻、淺黄櫻、黄櫻、霧谷、猩々、奈良櫻、麒麟櫻、仁和寺、金王、名島、三度櫻の四十三種なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎兼好法師が、櫻は單なるがよし、千葉なるは花の巧佞なるものなりといへるが、實に此花は單に限るなり。千葉の咲けども華々しからず、櫻雲を靉かすともなく、また散りぎはの如何にもシミッタレなるは、大和心にはかなひ難きものなるぞかし。

◎清人梅花の詩に不死煸下死花前の句あり、西行の如月の詠と同趣にて、梅と櫻とを異にせり。彼國にも櫻あらんには、必ずや梅とはいはざりしならん。朱之瑜舜水、我國に歸化して、甚だ櫻を愛し、庭に數百株を植ゑて曰く使中國有何冠百花と。支那洛陽にては牡丹を花といひ、蜀にては、海棠を花といふと、我國にて櫻を單に花といふが如し。

◎櫻の名を帶ぶるもの、魚介には攝津の櫻鯛、櫻井濱の櫻貝、味噌に櫻味噌、美人に櫻兒（謠曲 櫻川の兒の名）衣服に櫻直衣、鎧には前にいへる小櫻絨、駿馬に薄櫻(盛衰記)。櫻井てふ地名は河內、相模、越後、石見、伊豫、肥後の六ヶ國に在り。櫻木村は美濃、若櫻村は因幡、櫻山、南櫻村、小櫻村は近江、櫻川町、櫻田町は東京(此兩所古へ櫻樹の多く在りし處といふ。)櫻間村は阿波にあり。

隨感

奠都祭

春四月、時正に花の盛り、東都の士人、遷府の紀念を祝せんとす。草茫々たる武藏野の景色は夢の跡にて、萬戶いらかを列べ、千門、國旗を交へ、檐端の張灯微風にゆるぎて、泰平の御世の操練にかたどり、爛熳たる櫻花、雲に棚引きて霞ヶ關の春の曙を忍ばしむ。府民歡呼して今ま其典に臨まんもの、抑も今昔の變化に驚ろきて、心深く感慨する所無きことを得るか。花崗石敷たらん如き街道を踏みて、ふと念ずらく、其かみ、草、虫に老て百年歲々露に敗れし荒野原が、如何にしてか四方五里、一千余町の大都會とはなりけるぞ。少しく郊外に出でて熟田熟土を見れば、悪草一莖もなく、土粉微かにして、老圃の信切徹底せり。人の氣根、世の繁昌の致す所亦た大なる哉と。試みに、高きに登りて觀れば、煙突の雲を突くもの、連壁の城の如きもの、巍峩たる洋館の青松白光の間

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

にかゝやぎ、千代田の城、年と同に彌よ莊嚴の觀を增すなど、眞に人意を強くするに足る。嗚呼是れ年々の人の力の致す所、刻苦忍耐の積る所、淺陋の手遂に劣敗して、質直優勝の手の維持する所、但だ夫れ賴母しき人の多くありて、更に追々に擴張する所、苟しくも、事物の進歩の基礎は、但だ人の赤誠忠實よく之が根抵たりと思ひ寄せらるゝにぞ、今の盛時に臨み、後の壯觀を樂しみて、心欣然として感涙を催ふす。奠都の祭に狂喜ずるとの如き、些か、痴態ながら、亦是れ眞面目の人の餘徳に益するもの、冲々たる親仁の苦心に家繁昌し、子孫門前の仁和賀に餘念なきが如し、寧ろ兒輩の愛嬌ならずや。吾人は信ず、古今忠重の靈も亦た一笑して之を嘉納せんと。則はち、暫らく假裝行列の後へに笑ひ、牛車花櫻の氣遣りに喝采して、人々の只連りに笑ふに笑ふとは云ふ。

斷えず後るゝの人

所云る御一新變革の際、疊一疊文久二文、家一軒金一兩にすら買手の無かりし比、いや〳〵乍ら其の流れを引受けて今日

莫大の益を得しもの、江戸東京となりて東京府の御拂ひ下に、所々の古屋敷、茶畠など少しづつ買入れ、今は時勢の進歩によりて、巨大の利を博せし者坏多くあり。今の年少此等の逸話を聞きて、惜むと一と方ならず。我にして若し其時にあらしめば、明かに先見を立て大胆に買入れ、今日非常の富を作りしものを、不幸にして其機に後れて生れしぞ遺憾なると。何事によらず、往事を論ぢて屢は斯る不平を吐く人士多し、吾人ひそかに一笑せざるを得ず。夫れ、今の時の變遷は、維新前后の變遷よりも急なり。今の末路は、幕府の末路に似たり。看よ見よ、歴史は同歩に繰り返して、人心ひとり回顧せず、只切りに往事を論ずるとを爲して、眼前の實勢を見ず。苟くも人世進歩、日として休するとなきの現代に立ち乍ら、機に會せずとの歎きを發するとやあるべき。眼下つねに機會あり、歩々智を用ゆるの道存す。もし現在の地位に於て其の伎倆を施すと能はずば、往年の當時に在らしむるも、暗として知るなきと、依然其の今日の如けん。凡そ、用ゐられざるを歎ずるほどの人は、用ゐたりとて左したる偉人にあらず。時に後れしなどかこつ人は、時に合ひたりとて、別段の事は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

為すまじ。但だ彼の常に修め、常に安んじ、常に玲瓏として徹底し、古を見ると今の如く、今を見ると古の如く、東西を一つにし、彼此を同にして、洞然として定見深睡の妙に居るものこそ、恐ろしけれ。

名士何によりて老ゆる

時勢は風の如く、人は子供の弄ぶ風船玉の如し。たゞ風を吹入られたるものぞ、フワ／＼と飛び上り、高く中天に舞ひのぼりて、巨木亭樹を下に見る。流行に乗りて一時に時めける士人の見幕は之に似たり。一朝、時勢の變化に會すれば、風ぬけて、シワ／＼と皺み、張りもなく、色もなく、飛ぶとも舞ふともなし、眞に見そぼらしき姿なり。近年の名士追々に馬鹿氣に見え來り、其の熱叫するとも大抵人心に響かず、何故相も變らず舊弊一偏の事を繰り返すものにやと思はるゝようにならば、これ必らずしも名士の老いさらばひしにはあらず、時勢の變化せしなり。時勢に後れたる人の言葉は甚だ馬鹿氣に聞ゆるものなり。之れ聞く人の智慧の上りしにはあらず、時勢に從つて聞かんとすれば也。

丈夫如何か愛す

女は、たよらんとを欲し、男は、保護せんとを欲す。如何に強き女も、枕らして首をよせ、侍べりて心づよく、第二位に立ちて、内助して靜けく暮すにあらねば、心落着くとなし。然らざれば、氣荒く、ザワ立ちて、女心地出でず、我も人も不快に覺ゆるなるべし。男は、如何に弱くとも、我れ之を保護すとの感覺なければ、女性に對して自得滿足の氣出でず、痴情冷却する比ほひ、忽ちにして厭忌の心地出づべし。此の故に、女のひたすらに雄々しくて、毫も保助を寄すべき可憐の態なきものは、大率ね勇ましき丈夫の愛を受くるとなし。丈夫は、其の力を獻げて、女性の爲に敵と戰はんとを欲す、此の戰ひ即はち中心の爽快とする所なり。此をもて、英雄屢ばたをやめに許し、矛を揮つて、虞や虞や汝を如何せんの歎きあり。男子の短所にして長所とゝに存す。又心雄々しくて、獨立特行の氣慨あるほどの女子なりとも、其の意中の人に對して、女心地の花の咲かん時とそ、優にやさしくも、あはれなるべけれ。陰陽この微妙の感交を結びて、男女相合ふ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ところ、妙にして麗はし。未た花を見ざるの人、たゞ植物學的の解剖によりて冷やかに論却する莫れ。

傳道の言論已むとを得ず

凡そ、何もの、妙事にても、心に深く得たらんほどの事は、言語道斷して、默して微笑するの外あらざるべし。彼の喋々として論じ、論じ盡して餘蘊なきを得るなど申さん人こそ、如何にも心得がたきとなれ。中にも、宗教の信仰などは、心の底、胸の奥に安座せしめて、かろ〳〵しく開張すべくも、あらず、之を冷たき論理に包みて人に見せんなどは、安んじがたきとなり。但だ彼の煩惱の惑ひに苦しみて、執着の羈絶ちがたき人の哀れを見ては、如何ともして、其の苦より去らしめたく、其の歎きより忘れしめたくと思ふの餘り、樣々に慰め、種々に說き、或ひは比喩し、或ひは論破し、只だ一向に其の信念をかき起さまほりす。之れ傳道の言辭にして、誠を寄するの道、古人所謂る善巧方便なるもの、これ也。然し乍ら、初めより、方便を用ひんとも思はねば、比喩論辯を悉さんとも願はず。もし一語の喝をもて彼の人の心幸ひにして

安座せば、之に越したる欣喜とてはあるまじき也。大救主の徒弟に於けるや、一言命じて曰く、我に從へよ、我を信ぜよと。而して、其の徒弟は趨りて之に歸せり。嗚呼かゝる大いなる御感化力に附從するものこそ幸福なれ。

草木豈に非情ならんや

つく〴〵と世相を觀ずれば、人の中の賢きと愚なると、左したる懸隔にはあらず。正しき、正しからぬも、五十步百步の論なり。此の故に『汝曹の中、罪なきもの彼女を石にて打つべし』と言はれんには、眞に能く擊つものはなし。至聖の人、『我も亦た汝を罪せず』と宣ふ、これ抑も慈悲の故のみにあらず。大觀すれば、人大率相同じければ也。こゝに於てか、先聖は曰く、一視同仁と。これ只だ愛の教にあらず、亦た識見の言葉なり。萬人を一視して同仁の心を寄す、此に於て初めて稍や人生の實相を觀じ得たり。更に博く詠むれば、山川草木亦た情あり。一々、造り主の御力を分賦せられて、相應の天稟をうく。親あり子あり、血あり、淚あり、亦これ一社會を爲す有情の團結なり。人未だ之と語を交さず、之

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

によつて彼等の情態を悉さず。僅かに、顯微鏡下に其の本躰を尋ねんとす、眞相を悉くしがたきは當然なり。たとひ人相接するも、之と言語は交ゆることを得ず、之と情感を結ぶを得ず、單に顯微鏡下に照らして研究せば、能く其の眞を洞見することを得べき乎。人のよく山川草木を知らざるは、知りがたければ也。知らざるが故に之を非情とす、乃はち是れ無情にあらずや。世尊慈眼をもて之を觀じ、或る時敎へて曰く、山川國土佛性を具すと。

識らざれば也

救主、假盧祭の大節會にエルサレムに上り、天下の群集に對して一大說法を垂示す。聽衆大いに罵しる時、憐れみて一言して宣ふ、汝曹は識らざれば也と。時來り、身を獻じて、十字架上に卑刑を受くるの際、泰然として鎗を受く。刑の兵士を見下して、憐れみて曰く、神よ彼等の罪を許し玉へ、彼等は識らざれば也と。あゝ、識らざれば也の一句、萬代の人心を痛絕せしむ。たゞ此の一句を徐に吐き、慈然として人の罪を愍れむ。救主の大悲は想念以上に超ゆ。

眞情の文字

俳諧寺入道一茶は天明以後の俳壇の一俊傑あり。信濃の國の人、幼にして繼母の手に苛虐なる養育を受け、齡なほ六歲にして、

我と來て遊べや親のない雀

の句あり。後年自ら此句に前書して曰く、

親のない子は、どこでも知れる、爪をくはへて門に立、と子供等に唄はるゝも、こころ細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に、木萱など積みたる片陰に跼りて、長の日を暮らしぬ、我身ながら哀なりけり。

といへり。彼句、此文、之を誦するもの、誰か淚ながるべけんや。悽愴悲哀の情、數十の文字よく之を盡くすといふべし。一茶の俳諧は滑稽に長し、且つ奇想磊々たるものあり。而して其俳文に至りては、風俗文選、鶉衣等と其趣

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

きを異にし、平淡にして、其味ひや至つて深し。今左に其「をさな子」の一篇を示す。

○○○○

とその夏、竹植る日のころ、うき節しげきうき世に、生れたる娘、おろかにして、ものにさとかれとて、名をさとゝよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうち〳〵、あはゝ、天窓てん〳〵、かぶり〳〵ふりながら、おなじき子ども、風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせける。やがてむしや〳〵しやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある、茶碗を打破りつゝ、それもたゞちに倦みて、障子のうす紙を、めり〳〵むしるに、よくしたゝ〳〵とほむれば、誠と思ひ、きやら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。こゝろのうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく、清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なか〳〵心の皺を伸しぬ。又人の來りて、わん〳〵はどこに、といへば、犬に指し、かあ〳〵はと問へば、鳥に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれてあいらしく、言はゞ春の初草に、胡蝶の戯るゝよりやさしくなん覺え侍る。このをさな、佛の守し玉ひけん、迨夜の夕暮に、

かしこくも、いだき起して、うらの畠に、尿やりて、乳房あ
てがへば、すは〳〵と吸ひながら

持佛堂に蠟燭てらして、鐘打ちならせば、どこに居ても、いそがはしく這ひよりて、さわらびのちひさき手を合せて、なんむ〳〵と唱ふ聲しほらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝なり。それにつけても、おのれかしらには、いくらの霜をいたゞき、額にはしば〳〵涙の寄せくる齡にて、彌陀たのむすべもしらで、うか〳〵と月日を費すこそ、二ッ子の手前もはづかしけれと思ふも、其坐を退けば、はや地獄の種を蒔きて、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつゝ、剰へほとけのいましめし酒を呑む。折から門に月さして、いと涼しく、外にわらはべの踊の聲すれば、たゞちに椀投げすて、片ゐざりに、ゐざり出でゝ、聲をあげ、手眞似して、うれしげな子をみるにつけつゝ、いつしか、かれをも振分髪のたけになして、をどらせて見たらんには、廿五菩薩の管絃よりも、はるかにまさりて、興あるわざならんと、我身につもる老を忘れて、うさをなんはらしける。かく日すがら、をじかの角のつかの間も、手足をうごかさずといふ事なくて、遊びつかれるものから、朝は日のたけるまで眠る。其内ばかり、母は正月と思ひ、飯焚きそこら掃きかたづけて、團扇ひら〳〵

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

汗をさまして、閨に泣聲のするを、目の覺る相圖と定め、手かしこくも、いだき起して、うらの畠に、尿やりて、乳房あてがへば、すは／＼と吸ひながら、むな板のあたりを、うちたゝきて、にこ／＼笑ひ顔をつくるに、母は長々胎内のくるしびも、日々襁褓の穢らしきも、ほと／＼忘れて、衣のうらの玉を得たるやうになでさすりて、一人よろこぶありさまなりけらし。

　蚤の跡かぞへながらに添乳かな

幼兒が無邪氣に遊びたはぶるゝさま、親を慕ふさま、親の子を愛するさま、まのあたりなるがごと寫し出され、情至り、趣を盡くす。如斯きをや實に眞情の文字をやいはん。

また男に去られ、子を置きて歸りし母親の情を寫して、

男にきらはれて、親のもとに住みけるに、おのが子の初節句見たくも、晝は人目しげゝれば、

　さられたる門を夜見る幟かな　　よみ人しらず

子を思ふ實情さもと聞えて哀なり。たけきもののふの心を、やはらぐるとは、かゝる眞心をいふなるべし。いかなる鬼男なりとも、風の便りにきゝなば、いかでかふたゝび呼び歸さゞらめや。

と親の心をいひたる。これもまた涙催すものなり。一茶には此種の文字多し。自ら親なきを苦しみたるゆかりもあれど、彼は天成熱情の詩人なりしなり。

兒籃

小天使

かもめ

雲ふりしきり、風いと寒く、行かふ人の跡絶えて淋しき、或夜の事、何處からともなしに來た、小兒の天の使一人が、たゞ獨り、とある街を彷徨ふて居た。肩に生ひたる、さゝやかなる二枚の翼は、降り積む雪に、ヒタぬれて、飛ばんにも、翔らんにも、心の儘ならず、行きなやめる足元は、タヂ／＼とよろめきながら、雪の上に、小なる跡を印しつゝいつた。元より此夜の事であれば、月影も照らさず、星の光も輝かず空の日や月や星の光を、階子となして、天に上り、また降るといふ天の使は、此夜は、空の自分の内に歸ることが出來ず、天人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にも五衰の歎きあるといふとだか、今此の小さき天の使は、正に其歎きをうれひつゝあるかのやうに見えた。それで詮方なく／＼、人々の家の前に立ち止まつて、軒別に、雨戸を輕く叩いて、微な聲をして、今晩だけ泊めて被下いと哀願したが、何處とも、呼び入れて呉れるものがない。訪ふ聲が聞えないと見えて、内では、あゝ、雪がばた／＼と雨戸に降りかゝる、明日は、きつと澤山に積むにちがいないといふもあれば、小兒の聲で、朝になつたら嬉しいな、隣りの三ちやんと、大きな雪達摩をこしらへやうといふのも、聞えるが、かりそめならぬ天の使が、外面に立つて、ドウカ、その温かさうな火鉢のはたへ寄せて被下い、其代り御禮には、キット心の慰みといふものをさしあげますといふのが、人の耳に入らないから、天の使は、いよ／＼悲しくなつて、泣いてゐた。天使が訪ふた家々の中で、空想家は、クワッ　クワと燃ゆる火にあたつて、その火の温かみで、心がウツトリとなつて、夢うつゝの境に入つて、盛んに空想を畫いて、そして天使の嘆きもまたその空想の裡に葬つて仕舞つた。職人共は、時刻の過ぎ易いので、精々と夜業をして、餘念がない。また心配や

悲嘆に苦しんでゐるものは、我と我心を慰めんとして、無益に苦しんで、猶更に悲しみを重ねて、今しも、戸の外に立つて、天の使が、慰めと安きとを授けるからと訪れてゐるのを聞きつけない。

嵐はいよ／＼烈しくなり、雪はいよ／＼深く積つて來て、いよ／＼寒さに苦しみ、疲れになやむ、かの小さき天の使は、軒端朽ちて、この大雪には、くづれ落ちなん風情なる、貧しき賤の伏屋の前に來て、此處では宿を假すまいかと、またハタ／＼と戸を叩いた。處が其聲を聞きつけて、内から一人の婦人が出て來た。其婦人といふは、年もはや盛りを過ぎ、あまつさへ、貧苦にせめられ、病氣に惱み、其外、様々の浮世の煩ひに迫まられて、顔はほそつて眞青に、軀は瘠せ衰へて、實に見る影もない、此世の命の程も、今日か明日か、油の盡きた燈火の、今にも消えなんとするに等しき風情であつた。されど心根やさしき此婦人は、雪の嵐に行きなやみたるかの小さき天の使を、家の内に抱き入れて、爐に僅かばかりの粗朶を折りくべて、暖まらせ、濡れた翼を拭ふて乾かさせたりして此夜中、親切にいたはり介抱して、我兒のやうに可

愛がつて、暖き衾の中に抱きしめて安々と眠つた。

夜も、ほの／＼と白み行く時分より、嵐も靜まり、

愛がつて、薄き衾の中に抱きしめて安々と眠つた。

夜も、ほの〲と白み行く時分より、嵐も靜まり、雪もやみ、やがて、特更に磨き立てたやうな太陽が、東の山の端から昇つて、其光大地に滿ち〲て、この白皚々たりといふべき銀世界を照らして、きら〲と輝ぐと、かの小さき天の使は、ヒラリと身をかはせ、羽ばたきをなして、この賤が伏屋の破れ窓よりして、空に歸つた。出で立ち際に、まとに優しく親切な婦人に、接吻をした其時即ち、この貧しき婦人の此世の息は絶えた。此人は、臨終のきはに天の使を抱きて慰めを得て、そして死しては、この天より來りし一夜の客人と共に、魂は天に歸つたであらう。

以上は獨乙詩人ブルーメンタールの作 (Die Vergeltung) の意を述べたるものにして、其英譯詩は、去月音樂學校に於て開かれたる音樂會の節ガルスト夫人之を獨唱したり。

亡妻新盆

かたみ子や母が來るさて手を叩く　一茶

史談

無冠の女皇

ウイラード女史を評論す　鷗村

維年二月十八日、萬國婦人矯風會々頭、フランセス、エリザベス、ウイラード女史、紐育の逆旅に客死す。世界到る處、苟も、女史の偉業を慕ひ、其名聲を思ふもの、擧つて、これを痛戚す。女史は實に當代天下の一大人傑なり、此人にして、今隔世す、志あるもの誰か之を哀悼せざらんや。

後代の史家にして、もし十九世紀偉人傳を編述せんとするものあらば、彼に正に、プルターク英雄傳を幾倍するの意氣と勞力とを有するを要す。當世紀は、今や僅に二年の後にして、將に盡きなんとするに際して、過ぎにし方百年の歷史を回顧すれば、この多事多端なりし時世の、必然の需要によりて、英雄偉人、凡そ其高名の傳ふべく、遺烈の錄すべきもの、濟々として多く、如斯に多きは、實に當世紀絕大の誇りなり、豈

にまた盛ならずや。而して此頻々輩出せる偉人物中、吾人はまた二人の偉大なる婦人の在るあるを見るなり。其一人は即ち、近く即位六十年紀念の祝祭を擧げたる英皇ヴィクトリアなり。女皇は、實に古今稀に見るの英主にして、虞翁の如きも、此皇に於て、大爲政家の伎倆あるを認め、ヂスレリー等が、婦人參政權に贊成したるも、女流現に此大手腕を有するものあるを見たるの故なりといふ。女皇の事たる、今暫く之を說かじ、而して此英明の女皇と相肩比して偉大なるものは、即ち、當今、吾人の痛感措く能はざる、米國の一平民にして、ステッドが「米國平民政治の無冠女皇」なりと稱したる、彼ウィラード女史なりとす。

ウィラード女史が、其六十年の生涯は、女流としては變化に富みたるものなりき。されど、女史をして、よく其天稟の大才を發揮せしめたるものは、即ち其畢生の事業たる、婦人矯風會に在り。幼少、既に頭角を衆中に抽でて、學成りて、一度び歐亞の間に遊歷して、得る處多く、歸國の後、撰ばれてエヴアンストン女子高等學校第一の校長となれり。其生徒を率ゐるに自治の制度を許したる等、識見既に凡ならず、當年

の學生にして、今なほ、女史が薫陶敎化の恩を荷ふもの尠からず。敎育家たるの伎倆世に識られて、其後また紐育の師範學校の附托するに校長の任を以てせんとしたるも、此時は、女史既に千八百七十四年このかたタムソン夫人等の帥ゐたる禁酒十字軍の熱烈なる運動に感奮する處あり、我天職の此事業に存するを確信して、遂に婦人矯風會を起したるの後なりしを以て、年俸二千五百弗を受くべき此榮任を辭して、同時に推選せられたる該會長の任の、自ら給するとさへ至難なりし地に就き、爾來二十年間、心身を挺して、此事業に當り、天下婦人の盟主となり、女權擴張、家庭保護、悪風矯正の爲めに、多く勞して、多く成したり。

女史は之を過去の成績に徵するに、一個の敎育家としても、必ずや大に成効すべきものなりけん。其力量を以てすれば、ハンナ、モーア又はメレー、ライオン等の女流敎育家と肩比して必ずや等を下るとなかりしならん。また幼少にして夙に、文學の才能の尋常ならざるを示して而して數種の新聞に記者として多少の成績を奏したるとすらあり、且又其著書に由て判ずれば、女史にして、其學才と其識見とを以て文筆に專らな

りしならんには、或はスチールたると難きにあらざりしならん。又ムーデー氏を助けて傳道に功ありし等、其跡を顧みれば、女史は實に多面多角の才能を有せしものなるを知る。如此の才能を以て、天職を矯風事業を認め、此事業を根據として、凡そ政治、社會、家庭の、婦人の內助を要する處には、其主義を奉じて、用捨なく進入し、正義博愛の大道を唱ふ。女史は實に此事業に於て最大の發達をなして、其大手腕を揮ふことを得たり。其名の世に傳へられ、史の之を錄すべき所以は、實に此事業あるによる。

婦人矯風會の事業たる、恰もブース將軍が指麾する救世軍を女性化したるの觀あり、實にやウィラード若し男性なりけんには、救世軍を起すべく、ブースもし女性なりけんには、矯風會を起さん、双者の間、互に親密なる同情の存せしとは、自から其理あり。されば其突飛進擊的なるより生ずる弊害も、亦相類似するものありてこれが為に米國婦人の進步は、却て損害を蒙りたりといふ者もあり。凡そ事業は其根本の理想に於て高尚善良なるも、なほ、其運動の餘勢と、殊に附隨する彌次馬連の擧動とによりて、多の弊害を齎し來ることあるものなり。吾人は、婦人矯風會の事業運動に必ずしも悉く同情を寄すること能はずと雖も、其弊處を棄てゝ根本の理想に立ち入り、ウィラード女史の眞心を尋ねれば、この事業たる即ち、將來に於て必ずや來ることあるべき、世界統一の氣運の趨勢に助力するを大主旨とせるものならん。世界各國に支會を起し、五十ヶ國の婦人男子をして、其ポリゴルトペチションに連署せしめたるの業績既に大なりと雖も、この大運動の間に、世界の婦人をして、互に同情を通じて親交を來たさしむるによりて、彼大氣運を歩一歩に招き寄せんとし、純潔なる白色のリボンを以て、天下を一に結ばんとするの理想に至りては更に大ならずとせんや。

女史が此事業に任じたる二十年間の事務を平均するに、一ヶ月間の旅程二千哩、一年間の書信二万通、一日一回の演說に相當し、これに加ふるに、數種の大小著述あり、且、每週發行の機關新聞に筆を執りたり。蓋し驚ぐべき事務家に非ずやされど事務家たるとのみを以ての故に衆に長たること能はず。女史はまた一大政治家たるの伎倆と權威とを有したり。米國々民は華盛頓白聖館に大統領を戴きて、而して其婦人の

最多數は諸國の婦人と共に、シカゴ、テンプルに於ける女史を首領と仰ぎ、其旗のひらめく處に衆は手足の如くに動き、其言ふ處法となる。其明快の辨、其達文の筆の說く處、教ふる處に權威あり、衆また其德に心服す。ステッド嘗て英國女皇を評して「彼女は爪さきまでも政治家なり」といひしは、また當に以て此ウィラード女史に加ふべし。多くの人はまた曰く「女史は、天成の首領なり」と。米國もし婦人の大統領を出すの日ありて、而して女史にして其日を見るを得たりけんには、さしづめ、第一に大多數を以て選出せらるべきは、此ウィラードを措いて、他に其人なかるべし。

女史が、此伎倆と權威と德望とを有せしは、素より其學識度量ありしによれりと雖も、女史が成功の最大秘訣は、其主義なり、其信仰なり。信を宗教に立て、百難を排し、其職に從ひたり。其ジャンダークを以て理想の人物としたる所以思ふべし。其宗教は、宗派、教會の保障を設けず、羅馬教會にも結び、救世軍をも友としたるは、また以て其識見の太なるを見るべし。

女史またよく人を愛し、其書簡の如きは、實に情愛を以て滿てり。嘗て某女子大學校に臨んで演說して曰く、「已れもし諸氏の中より共働者を求めんには、先づ其學識の如何は、之を措いて問はず、たゞ其友を愛するや、其下僕、新聞賣子、門守る犬にも親切なるや否やを問ふ」と。女史はまた母のやしき情愛を喜び、自ら其母氏の愛情の如きものを有せんことを欲せしなり。若し一度び失戀の人（女史かつて失戀せしと傳ふ。）とならざりけんには、女史は必ずや平和なる家庭の妻となりて、賢兒を生むの母となりしならん。しかれども一生遂に人に嫁せず、天下の家庭をして、これを高尙ならしめこれを純潔ならしめんが爲に、其心身を捧げたり。凡そ婦人の世にある、其職とする處、內助に在り。而して其內助とは、單に一家庭裡に止まらずして、天下國家の百般の事業に於て、男子外に働き、女子內に助くるの要あり。ウィラード女史の如きは、即ちこの廣き意味の內助者として、社會の進步家庭の發達の爲めに、最も多く勞せしなり。女史は、米國婦人の美しき代表者にして、而してまた當世紀に於て發達したる人道博愛の一大宣傳者なり。此人、今や逝く、惜むべき哉

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雑録

時勢と女學史

三輪田　眞佐子

孟子曰ひけらく、學者すべからく時を識るべしと。實に人は學事のために生存するにはあらず、生存のために學事をなすべきものなるに、往々本末を顚倒するものあるは、迂遠の至りにこそ。わきて今日敎育を受ぐる女子は、時運の如何なるものなるかを知りて、學ばざらんか、全く心を勞し、時を費しながら、一身は更なり、一國の益ともならざる迂遠のものと言はざるべからず。

我が國の文學及び敎育史を考ふるに、女子も時代の風潮に相應する學問を修めけん跡は、さやかに見ゆるなり。そも〳〵我が上古に文字ありけんか、否やにつき論らふものあれど、たとひ文字なかりけりと假定せんも、人に敎育を施すは難からず、又文學は人の心に胚胎するものなれば、文字なきころよりも、その要素のみはありけりと、言はんも、可ならん。兎に角、今日傳ふるところによれば、豊玉姫の命が、夫の君なる彦火々出見の尊をば、ほめ奉りて、

赤玉は緒さへひかれど白玉の
君がよそひし尊かりけり

とあり。なほこれに類する例は、上古に少からず。されば、我が國には上古より、女子も男子と相適ひて、歌などをよみけるは、明なり。蓋し上古にては、男女ともに愛情などを歌ひしもの多かりけめど、反りてその頃の人の自然に浮ぶ感情なれば、さもあるべきことにこそ。凡そ男女は車の兩輪の如し、故に男子の智識に相應したる智識の女子あるは、最も兩性の權衡を得たる、めでたき時代と言ふべし。

神武天皇の后宮伊須氣余理姬が、その三人の御子をば、庶兄が害せんとなし奉るを、御子たちに諷し給ひける、御歌に、うねび山ひるは曇りぬ夕されば風ふかんとぞ木の葉さやげるとあり。その他弟橘媛の御歌を見るにつけても、尊き雲の上の御方と申すものゝ、上のなすところ下これに倣ふ理なれば、當時も女子は女子に應分の女學ありけんと推知するに足

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ろべきなり、
降りて奈良朝に及びて、我國の學問は、漢文の分子を混合して、いと盛なりしかど、いまだ女子には直接に學問の必要なかりしを以て、交際上和歌を讀むばかりなりけんも、歲月の經過に伴ひて、漢學の興味を世人の知るに至りけり。進みて平安朝のころは、女子も白氏文集などを讀むに至りけり。殊に一條天皇の御代に、清少納言は皇后定子の宮に仕へ、紫式部は上東門院に仕へ、同時に赤染衛門、大貳三位、和泉式部伊勢大輔など輩出しけり。
右才媛輩出の時代を考ふるに、そは藤原氏の榮華を夢みしころなれば學問は全く娛樂のために過ぎざりければ、紫式部の源氏物語を書きけるも、全く門院の御徒然を慰めんためなりけん。清少納言もこれに劣らじとて、曇藤氏なる物語を綴り、次ぎて今日世にもてはやさるゝ枕の草子をものしけり。
その他當時女子の手になりける文字少なからざりけるも、多くは漫筆、日記あるは和歌等にて、恐くは良妻賢母の資格を養はんために學問せしものにはあらず。さればにや當時の才媛者流に、操行の正しきものは少かりけり。そは全く藤氏の華奢遊逸の風潮が、女學に影響せしによりけん、あはれ。

轉じて、鎌倉時代は武人世界となり、學問は殆ど僧侶に委ねらるゝ姿になりければ、おのづから學問は佛敎の臭味を帶びけり。その時代を代表するものは、十六夜日記なり。そは子をおもふ親の心を寫しゝものながら、佛に歸依する阿佛尼の作なればとて、禪味を含むは、讀者の知るところならん。
室町時代となりて、足利氏の跋扈するや、いよ〳〵武人の天下となりければ、女子もその風潮につれて、武術などを練るに至るほどなりけり。などか文字を學ぶ女子ありけんや。
德川時代に於て、家康が藤原惺窩林羅山などを登用して、儒敎を布きけるや、牝雞の晨に鳴くは、家の禍などの學說大に行はれ、次ぎて貝原益軒が儒敎により、女大學等を著し、以て女子に三從の道ありなど、全く儒敎主義を以て、女學の眞髓となしけり。元來我國の女子に、貞操柔順等の美德あるは、しき島の大和のおのづからなるてぶりとは言へども、儒敎の功德もあるものと思はざるべからす。從ひてこの時代には、亦女子にも漢學者あり、歌よみあり、或は俳諧者ありけるも、悉く儒敎の感化にて、淑德を養はざるはなかりけり。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

徳川時代は單に儒敎の盛なるのみならず、和學も亦其復古をなせしかば、女子も亦愛國の觀念を起しゝことは忘るべからず。

明治の改革と共に、女學校の制度起りて、女子にも普通の敎育を施す必要を感じ、多少の變遷を經て、現今の高等女學校となりぬ。これ亦時勢の必要に驅られて起るものなり。おのれは、各地方に續々と女學校の設けありて、以て時勢の必要に應ぜんことを願ひて止まざるなり。女子敎育の盛なるは、外は列國の侮を防ぎ、内は國風の美をなすに足るべし。由りて以上、我が女學史の一端をしるして、女學と時勢との關係を述べぬ。希くは女學の隆盛ならんことを。

海舟翁の史談

（天海、澤庵及柳生の人物評）

◎天海と澤庵

天海や澤庵の如き人が、常に將軍の坐右に置かれたも、やはり是は民と親み、民間の實情に疎くならざらんが爲めの手段だ。家康が天海を聘された根元に就ては老爺に一説ありだ。家康と云ふ方は、幼時今川家の人質となつて、彼の地の臨濟寺で讀書習字を覺えられた。彼の寺の和尚は中々の高僧で、今川家の顧問であつた。家康には幼時是等の關係が腦髓に染みて居て、即ち天海の如きものゝ政治上に大切なるを認められた。天海は中々の奴だ。彼れが今少し頭を圓くせずに居たら、確かに家康に向て弓を挽き得たであらう。彼は其宗家蘆名家の滅亡により落魄して、叡山の坊主となり、彼處に苦學したるものだ。中々今時の書生見た樣に、學資などがあつて勉强したものと違ふよ。一朝家康の知遇に感じ、德川氏の爲めに畫策經營の勞を取つたのだ。

彼の爲したと云ふ事迹は、一つも世間に顯はれて居らん。何も書いたものも殘つて居らん、ごゝが天海だ。今日爲した事を、明日直に高慢説法するは、今日の流行だ。何を爲したか分らん、しかし何處となく大きく、世人が說得し得られん所に、人心を感ぜしむるものがある是れえらいと云ふものだ。澤庵も亦た元は一個の雲水僧だ。日本の國中を巡歷して、普く國々の事情に通じて居た。是れが三代將軍の目鏡にかゝつた所だ。

◎澤庵と柳生但馬守

復た其進めた人物のえらかりしを以て、澤庵のえらかりし事が分る。彼の柳生と云ふ人は、決して一個の劒術家ではなかつた。三代將軍に對して、中々權力があつたと思はる。是れも何も外に顯はれては居らぬ。しかし一躰に權勢ある實位に居れば、自然と人々の注目を惹き、種々の纏綿も生じ、本當の仕事は出來ぬ。そこで、一箇劒法の指南役で、君側に出入し、表面は御面御小手で一生懸命に遣つて居れば、誰れも氣が附かずに濟む。柳生は確かに此の呼吸を知つて居た。彼れが將軍に對し非常の權力があつたと思はるゝ一つの證據がある。彼の島原の亂起るや、將軍は直に板倉内膳正に征討の役を命じ、直に島原に出發させた。柳生は此時或る大名の招に應じ、馳走になつて居た其席で客に來て居た大名方が、内膳正の人撰餘りに輕きに失したるを非難し居るを聞き、始めて此の事を知り、大に驚き直に其大名の馬を借り、一散に板倉内膳正を追尾し行つた。六郷に至り、死ても追附ぬことが分り、引返して其足で直に將軍の御前に出て、痛く諫言をしたと云ふ事だ。一躰將軍よりの嚴命で、已に出發したるものを、劒法の指南役位の身分で自から追つかけ引止めんなど云ふは、大概の者で出來る事でない。老爺は此の一事で、彼が人物のえらかりし事と、將軍に對し非常の權力を持つて居たと云ふことを見拔ひた。讀書の眼光など云ふはかゝる邊の事だ。（國民新聞に依る）

時文

◎女子教育　幣原坦著　集英堂版

此書は幣原氏が諸種の歐洲教育史中より、古來女子教育の趨勢、方今の女子教育を摘記して、加ふるに我邦の女子教育史の概畧を以てす。女子教育の歴史を窺ふには、簡易にして、知り易からん。

◎明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩　藤井玄溟著　日本赤十字發行所版

福島瓜生會長故瓜生岩子女史の、夙に慈善の聞えありて、四十年間濟貧賑乏の事業に東西奔走し其名九重の畏こきあたりにも聞え勳耜感賞を蒙ること度々、蓋し明治年間の偉女なりといふべし。此書此人の一生を詳述す。志あるもの須く一讀すべし。

◎新小說　第三年第四卷　春陽堂版

本卷載する處、松居松葉の滑稽小說「みあひ」ふたばの揚弓屋の白首物語「左びき」、小一鹿の「田舍醫者」の三小說、露伴氏が「百花譜」の續き、紅葉の雜筆、南翠の劇苑批評、孤月の時報評苑等、にぎはし。此卷より一大進歩をなしたりとの廣告なるが、前々に比しては、讀む處見る處頗る多くなりたり。

◎古の武藏野　大納言通方

武藏野は月のいるべき山もなし
をばなが末にかゝる白雲

女界文壇雜俎（本誌〆切まで）

◎婦道新論　裏錦第六十五號
◎女史の天職(二)(近角常觀)　花の園生第八年第七號
◎女子教育所感　教育報知第五百七十九號
◎私生兒の原因(留岡幸助)　新世紀第二號
◎内地雜居に對する日本婦人の心得(藤塚熊太郎)　女鑑第百五十三號
◎女生徒の奢侈　東京日々新聞四月八日

片々

◎東京日々新聞　女生徒の奢侈を慷慨して、吾曹を以て、之を見るに、先づ一般の學校に命して、嚴に奢侈を禁じ、衣服の如き華美を衒ふものは、富豪の子女たりとも、斷じて之を許さず、違ふものは退校を命ずるなり、其他の處罰を行ふなり、相當の制裁を加ふるを以て、對症の一療法なりと信ずと論じ、奢侈禁ぜずんば、女子の學事進歩せずといふ。

◎同志社問題　近時宗教界教育界の大問題は、同志社憲法變更事件たり。校友會員等反對運動に盛んなり。さりながら、反對の極達に同志社を如何せんとするものぞ。吾徒局外傍觀の望は、校友の運動に介意すると少くして、無乃同志社なるもの丶、今後の存廢を患ふ。否な更に進んでは、同志社なる一私學校の存廢を小として、基督教教育を如何すべきの問題につきて頗る憂ひとする處あり。

◎方今　小學校倫理教科三百余種と、仁義忠孝を教ふるの器械備つて饒かなりといふべきかな。

◎教師　は耳目口鼻を有する哺乳動物にして、人を教ふるものなりとは、東北の一小學生徒の作文。

◎乞食の熱誠　東京朝日新聞三月廿四日の紙上に見えたる、一乞食が其父の五十年以前越後柏崎に於て、義人生田萬の救護を受けたるの恩に報ぜんとして、困苦の餘金四圓を貯蓄して、同地の富豪、今井茂作氏に寄せ、生田氏の建碑料に宛てんとを乞へりと、生田氏は平田篤胤の高弟にして、天保八年、大鹽の殘黨と共に苛酷なる代官の邸を襲ひ、身は刑辟に觸れて、以て窮民を救ひたるもの、然るに今に至りては、祀絶え鬼餒られず、彼乞食これを遺憾として、多年の希望今日に及びたるものとぞ。嗚呼これ實に近時最も傳ふべきの美談ならずや。

◎女立ン坊　目下米價益々騰貴して底止する所なく、今や五等米すら將に四升の聲を聞んとする勢ひに至りぬ。これに從する諸物價の張勢又たいづれ
聲を聞んとする勢ひに至りぬ。

◎女立ン坊　目下米價益々騰貴して底止する所なく、今や五等米すら將に四升の聲を聞んとする勢ひに至りぬ。これに准ずる諸物價の暴騰又たいづれも目覺しき程なれば、僅かに力役をもて一家數口の炊烟を立て居る細民等の窮状は、唯だ日一日とその極度に赴くこと水の低きに着き、火の乾燥に燃るが如し。現に新宿裏町なる多數細民等の如きは、最早や資盡き力竭へ、南京米は愚か兵營の殘飯だも買ひ得ることを出來難きより、男女相觀ひ老幼相扶けて程遠からぬ田圃へ赴き芹、糯草など手當り次第に摘み取り來たり、是れにて一種の糧を造り、漸く露の命を繫ぎ留め居る程なりといふ。左れば脆弱き婦女の身にして馬方荷車の跡押等をなする者益々增加し、甚だしきは背に小兒を負ひ、懷中に嬰兒を抱きながら、新宿邊の往來へ女立ん坊に出向き居るもあり。恥を忍び外聞を厭ふに暇なき心根の程哀れなり。云々。（東京朝日新聞）

◎諸物價　騰貴して、未だ低落すべき見込なく、不景氣の聲四方に聞ゆ。今年は實に大困厄の年なるべし、悲慘の窮狀必ずや甚しきならん。この困厄は日に月にいよ〳〵甚しかるべき徵あれば、有志今に當りて、警戒充分なるべし。

◎外人の日本婦人論　一外人あり「イラストレーテッド、アメリカン」雜誌に日本婦人論を寄せて曰く、

余は幾多の外人が嘖々として止まざる日本婦人の華美なることを領解する能はず余は日本に於て華美と稱すべき婦人を觀察したることなし。勿論彼等は愛嬌あり人を樂ましむる引力あり淸秀なり、伶悧なり、切言すれば淸美なり、然れども彼等は決して華美にあらず。日本の藝妓は他國に於る者の如く不道德にあらず。而して上等及び中等社會の婦人は、最も德性の發達し心事の高潔なるが見る云々。（中央新聞）

◎懷姙自在法　墺國維納大學の教授シエンク氏が男女懷姙自在法を發明するや（前號片々欄內を見よ）米國プリンストン大學のマクロスキーは、之に反對して、滋養饒多なる塲合には女兒を生み、之に反すれば男子を生むべしといへり。

◎露國皇后とシエンク教授　紐育サン新聞傳ふる處によれば、露國皇后には、彼シエンク教授に依賴して、男子懷姙の傳授を受けんとの要求ありたりといふ。但し虛報ならんべしといふ。

◎讀誤り易き史上の名稱正訓「女子の友」其他に載せたるものゝ中に就きて左に摘拔す。

伊吉博德（いき、はかとこ）　石川年足（としたる）　石田三成（かずしげ）
石上乙麿（いそのかみ）　伊能忠敬（いの、たゞよし）　岩倉具視（ともよし）
八田紀知（はつた）　春澄忠繩（よしたゞ）　帆足萬里（ほあし）
捕鳥部萬（ととりべの、よろづ）　太安麻呂（おほ）　荷田春滿（かだ、あづままろ）
熾仁親王（たかひと）　熾仁親王（たるひと）　武內宿禰（たけしうち）
田道（たぢ）　中山忠能（たゞのぶ）　村上義光（よしてる）　曲直瀨（まなせ）
間部詮勝（まなべ、のりかつ）　藤原宇合（うまかひ）　加藤美樹（うまき）
文三家安（ぶんざうい へやす）　足利義詮（よしあき）　足利義昭（よしあき）
吉良義央（よしなか）は非なり義英とかく　南淵淸安（なぶち、しやうあん）
少貳賴尙（よりひさ）　角倉了以（すみのくら、れうい）　新井君美（きもさみ）
田沼意次（もとつぐ）　大石良雄（よしかつ）　三善淸行（きよやす）
橿原宮（かしはらのみや）　高津宮（かうづのみや）　金剛峯寺（こんがうぶじ）
日吉神（ひえのかみ）　問注所（もんちゆしよ）　追捕使（つゐぶし）
按察使（あぜち）　大學生（だいがくしやう）　大極殿（だいごくでん）
高陽院（かやのゐん）　公卿（くぎやう）　上達部（かんたちめ）
殿上人（でんじやうびと）　除目（ぢもく）　天平勝寶（てんぴやう）
大寶令（たいはうりやう）　令義解（りやうのぎげ）　姓氏錄（しやうじろく）
古文書（こもんじよ）　傳敎（でんげう）　神皇正統記（しやうとうき）
文章博士（もんじやうはかせ）　公事根源抄（くじ）

◎歷代御諡號　には定まりたるの讀み方あるを人々の讀み誤ること多し。其誤り易きものゝ正訓左の如し。

綏靖（すゐぜい）　應仁（おうじん）　反正（はんぜい）
允恭（いんぎやう）　顯宗（けんぞう）　皇極（くわうぎよく）
天智（てんぢ）　聖武（しやうむ）　平城（なら）
淳和（じゆんわ）　朱雀（すざく）

以上の外、仁は（にん）、明は欽明、用明、齊明、舒明、元明、孝明の（めい）と讀むの外は、凡て（みやう）と訓むべし。和は（わ）の訓、正は（しやう）なるべし。

時報

◎高等看病法講習　帝國醫科大學附屬醫院に於て今般同院の看病婦長を養成するの目的を以て、高等看病法講習規則を定めたり、其要領左の如し。

一講習年限を二個年とし前學年に於ては諸學科の講義及實習を課し後學年に於て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一 講習生は品行方正身體健全年齡二十三年以上三十年以下家事の係累なき女子にして、左の入學試驗に合格したる者に限る。

一 讀書　漢字交り文講讀　　二 作文　往復文　記事文
三 地理　日本地理の大要　　四 歷史　日本歷史の大要
五 理科　動物、植物、理、化學の大意　　六 筆算　加減、乘除、分數、小數、比例
七 體格

一 講習生は醫院内に寄宿せしめ食料制服及び日給金六錢を支給す
一 講習生は卒業後滿四年間定規の給料(月給金十五圓乃至金三十五圓)を受けて醫院の看病婦長を勤務するの義務あるものとす

◉高等女學校設立案否決　信州松本町會にては、高等女學校設立の議案を否决せり。

◎諸女學校の卒業式

●女子高等師範學校卒業式　女子高等師範學校にては三月三十日第九回卒業式を擧げたり。當日卒業生は、本科二十二名、專修生三名、撰科生二名、附屬高等女學校全科卒業六十三名、同補習科三名なり。

●女子職業學校卒業式　東京神田一ッ橋共立女子職業學校にては三月三十一日第十二回卒業式を擧行したり。卒業生は、裁縫科六十三名、刺繡科二十八人、編初科十二人、造花科十六人、圖畫科二人なども、一科若くは二科兼修生あるを以て人員にすれば九十七人なりといふ。

●東京府高等女學校卒業式　四月二日神田橋外東京府高等女學校に於て第十二回卒業證書授與式あり。卒業生は本科生五十八名、補習科生二十七名。

●東京女學館卒業式　虎の門内東京女學館にては、三月卅日其第八回卒業式を擧行したり。

●女子學院卒業式　東京女子學院にては三月三十日第八回卒業證書授與式を擧行す。卒業生は、全科生四名、英語中學科生七名、日本中學科生九名、保育科六名、豫科生十二名なりといふ。

●大坂梅花女學校卒業式　大阪西區土佐堀梅花女學校にては、三月三十日大阪青年會館に於て第二十學年卒業式を旅行したり。卒業生は、裁縫全科三名、邦語全科三名、英語全科三名なり。

●松山女學校卒業式　松山市松山女學校にては、三月二十九日第五回卒業式を執行したり。

●フェリス女學校卒業式　橫濱山手フェリス和英女學校にては四月五日卒業式を執行したり。

●鳥取市高等女學校卒業式　鳥取市々立鳥取高等女學校にては三月廿五日卒業式擧行、卒業生は、本科生九人、技藝專修科生七人。

●福井高等女學校卒業式　は三月廿九日卒業式擧行卒業生は二十七名。

●長崎梅か崎女學校卒業式　長崎市私立梅か崎女學校にては三月廿五日卒業式を擧行したり。卒業生は高等科三名、本科七名。

●光城女學院卒業式　山口縣山口町光城女學院卒業式は三月三十一日執行せられ、卒業生四名。

◎日本婦人矯風會の總會　日本婦人矯風會に於ては四月二日より四日迄橫濱居留地海岸教會に於て總會を開きたり。尙同會に於ては先頃加奈太トロントに開かれし萬國大會より授與されたる賞旗の授與式を擧行せり。當日は安藤太郎、矢島楫子、バリッシュ孃、三好退藏、淸浦奎吾諸氏の演說等ありしよし。

◎婦人製品博覽會　京都に於て開かるべき第一回婦人製品博覽會は、いよ〳〵四月十一日より五月十五日まで、京都御苑内博覽會場に於て開設することゝなれり。

◎信州上田學校女子部の燒失　信州上田町上田學校女子部校舍は、同町にては有數の建築物なりしが、三月廿七日夜、當日免狀授與式後の不取締より、火を發して、全校烏有に歸したり。それが爲に、町民の激昂一方ならず、校長久米由太郎氏は責を負ふて自殺するの悲慘を演せしが、町民はなほ町長馬場氏次氏に辭職勸告をなしつゝありといふ。

◎近江婦人慈善會　同會現在職員は左の如し但今回擴張に際し此内補助員及評議員に十名の新囑托ありしといふ。

(會長)園田鐵子、(副會長)西澤谷子、(仝上)欠員(評議員)古垣留子、川島澄子、淸水駒子、村治瀧江子、中西茂子、梅原時子、大澤淑子、藪田瀧子、中村元子、辻留子、上野愛子、筒井留尾子、石渡梅子、里見政子、(補助員)、西澤正太郎、古垣雍成、淸水保吉、川島純幹、北川民慎、中西秀夫、美代淸彦、林田民治郎、谷澤龍藏、石渡輔愼、西村文四郎、村田利兵衛、高谷光雄、郡田六之助、上野新右衛門、近藤明、伊藤紀 四川太治郎、(幹事)田口義門、三上尊持、元藤雄司、小野善伍、饗庭光久、三宅延壽、吉住素證、(會計)村田利兵衛、上野新右門。(近江新報)

◎東京美以婦人慈善會の近況　同會は目下百五十名計の會員ありて、貧兒教育並に窮困者救助の事に盡力しつゝあり、最近の報告によれば、昨年六月より本年二月に至る九ヶ月間の會費其他の收入金百四十四圓仝、支出金百十四圓にして、救助したる究困者は十余名なり。また同會にては三月二十六日に、春期奬勵會を開き、諸氏の演說、バザー等ありしよし。

◎美談　最近の諸新聞に見えたる美談には。◎龜鑑熊本縣鹿本郡千田村大字宮村平民農安倍酉藏の妻シヅの孝貞(九州日々新聞四月三日及やまと新聞四月七日)◎目黑女史の名譽(奧羽日々新聞三月廿九日)◎麻布本村町平井伊兵衛の妻いしの貞烈談(中央新聞四月三日)◎貞婦の心盡宮崎縣宮崎郡瓜生村大字柏田町小川吉太郎の妻スヱ(宮崎新報)(三月廿五日)◎烈女熊本縣玉名郡平井村故森山万藏の妻トマ(東京日々新聞四月二日)◎忠僕身を挺んでゝ主家の再興を謀る甲州北巨摩郡鳳來村の名所傳右衛門(岐阜毎日新聞三月卅一日)◎義俠家仙臺市北材木町高橋庄三郎(東京日々新聞四月九日)◎乞食の熱誠富豪の義氣(東京朝日新聞三月廿四日)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大日本女學會

☞會員募集廣告☜

總裁小松宮妃殿下副總裁鍋島侯爵夫人

◎本會贊成員は有栖川宮大妃殿下華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方八十八名

趣旨 本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむかため女學の講義を發行し入學すへき女學校を設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居なからに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應し輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期す●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれは今や新に學科を增設し紙面を刷新し更に第二回講修一期を開き新に會員を募集す志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第一卷より送本差支なし◎本會講義錄は女學講義と稱し畏くも皇后陛下の御覽を給ひ特に大御歌下賜ふの光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上ノ優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す◎會費一箇月參拾錢東修參十錢◎會則希望者は郵券貳錢を添て申込あれ

學科及び講師 ◎修身(女子修身談)細川華族女學校長か從來同校に於て演說せられたる者に係る(禮法)佐方女子高等師範學校教諭◎國語(國文)關根學習院教授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校教授◎歷史(日本歷史萬國歷史)大森文學士◎地理(日本地理萬國地理)喜田文學士(地文)脇水理學士●理科(物理化學)近藤工學士(博物)石川理學博士、生理衛生)未定●家事(家庭教育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校教諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士●割烹、御園華族女學校教授●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂、未定●手藝(活花點茶)田邊東京女學館講師

附錄 ●史談下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三大家◎お伽譚漣山人◎詞藻◎質問應答雜報雜錄

☞第二卷既に發行せり

東京市麴町區土手三番町二十八番地 **大日本女學會**

東京裁縫女學校々長渡邊辰五郎著

裁縫教授書 全部三冊 定價金一圓 郵税金八錢

取次販賣 東京巣鴨村庚申塚 **女學雜誌社**

女學雜誌一手賣捌

東京神田表神保町 **東京堂**

◎耳科醫院◎

診察時間 午前八時ヨリ正午迄

本郷區元町一丁目一番地 (水道橋外金刀比羅社東隣)

ドクトル **小此木信六郎**

を大方諸君に望む處ありしが、其後幾多の報告に接せしも、婦人問題や事項……
非ず。由て更に再び爰に調査項目……

統計集誌

毎月一回發兌
定價金廿五錢

第二百一號目次　（三月廿五日）

國勢調査私議……………………呉　文聰
自殺の統計…………………………岡松　徑
市民と普通教育と……………………横山雅男
萬國公會決議陸海軍統計調査綱目……高橋二郎
英伊兩國同盟罷業統計………………相原重政
衆議院議員一人ニ對スル各選擧區別人口……依田昌言
一月分外國貿易………………………關　三吉郎
人體ノ化學的分量……………………伊東祐穀
自明治二十五年度至同二十九年度歳出比較…………河合利安
米外十品東京市輸出入高（明治二十八年）……廣瀬吉雄
雜記………………………………

●入會者●東京統計協會定期會●昨年の全國米麥額●全國株式會社●全國各種銀行現在調●東京市の米麥相場●東京市の選擧實權數●阿片吸食者及營業●生蕃の戸口●萬國衞生及民勢學●民勢學會●遞信省統計主任●統計學の攻究●杉亨二翁の談話●呉文聰君の演說●寺田勇吉君の統計談●統計と大臣●統計材料蒐集の困難●統計學社第二十三回總會●新選議員の黨派●世界銑鐵產額●各國工業統計●スユス運河會社

發行所　東京市京橋區山城町六番地　東京統計協會

故若松賤子英文集

巖本嘉志子

一册正價金六十錢
郵税金六錢

小公子の譯者故若松賤子の英文述作に於けるや筆路頗る流麗なるを以て稱せらる。今此書は即ち女史が英文廿一篇を收めたるものにして、加ふるに女史の師友ブース氏及其他内外知友記する處の女史の小傳追憶記等を以てし、また女史の肖像を揭く。蓋し以て内外家庭の團欒の友となすべく、又以て尋常中學高等女學校等の英語敎科書となすに良好なりとす。

發賣所　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

●切拔通信の要旨

●切拔通信のなすべき概目は農工商業政治法律外交貿易政黨倶樂部教育宗教歷史詩歌運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上揭載の作は小說廣告に至るまで其委托に應じ網羅遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

東京市京橋區采女町廿一番地
東京通信社附屬
新聞切拔通信部

●切拔手數料大要

●一己の身上に止まる通信は一ヶ月金貳拾錢とし●一事業又は一事物に止まる通信は一ヶ月金參拾錢より金五拾錢まで●會社又は一團体の全般に關する通信は壹ヶ月金五拾錢より金壹圓まで●前記の事項と雖ども關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約を爲すことあるへし●月數に拘はらす件數にて委托せらるゝものは東京は十件に付金貳拾錢地方は郵税を併せ金參拾五錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せす●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

吾社が昨三十年九月十日發兌第四百四十九號紙上を以て婦人社會學研究の爲二十項の問題を舉げて、各地女風俗の調査報告を大方諸君に望む處ありしが、其後幾多の報告に接せしも、婦人問題や事頗る宏大、此等は未だ万分一をだに盡くすものに非ず。由て更に再び爰に調査項目を列舉して、投寄の報告、これより益々多からん事を希望す。

女學雜誌記者識

各地女風俗調査項目

一　男女交際の有樣
(未婚の子女の交際に關する世間の制裁は嚴なるか寬なる乎。男尊女卑か否や等)

二　家庭に於ける女兒の狀態
(家風庭訓の及ぼす教育上の特色ありや。女兒の遊戲、玩具手傳等に於て目立つものありや等)

三　主婦の義務、勢力、財產等に於ける特別の狀態

四　下女の風習、其雇入の方法規約、彼等が風儀、及び下女に對する家庭の態度

五　女子嗜好の傾向
(茶、花、琴、歌、又は義太夫、芝居、小說、常盤津、淸元、三味、踊、賭博弄花等、其他の遊戲

六　婦女子勞働の狀態
(勞働の時間。一日の平均賃錢。幼女の勞働者ありや、一般婦女子の勞働增加せるや。工女の風儀。婦女の從事する職業の種類。婦女の勞働過度なることなき乎。男子の勞働に比較して輕重如何。婦女が職業を撰擇する自由の有無。婦女勞働者は生計を支へ得るの賃錢を得る乎等其他)

七　婦人慈善事業の有無、組織、景況、及び勢力

八　婦人會の有無、組織、景況、及び勢力
(女同士の談話交際遊戲、又は觀音講の類を含む)

九　婦女子の教育に關する一般世間の意向、女學校の景況、學齡女兒就學の割合等

十　女學生の風紀、修學者の增減、其志望の傾向等
(女學生の主婦たる家庭、其歸鄕後の實蹟等を含む)

十一　婚姻、離婚の方法、及び再婚に對する世間の思惑
(早婚の弊なき乎、夫婦年齡の懸隔甚しき者なき乎、初婚大凡の年齡、婚姻の儀式簡略ならざる乎等)

十二　女子の風俗
(年齡に準ずる頭髮の結び風、帶の結び方、涅齒眉剃は何程まで衰へし乎。茶屋女、私生兒、密賣者の增加、婦人の飮酒喫烟。ここに交通、教育、興業等によりて影響されし近年女風の變化等)

十三　殊に目立ちたる女の服裝、はき物、手廻道具等

十四　宗教上に於ける婦女子の信仰、事業、勢力
(女子の特に歸依信仰する神佛の名稱、願かけ、願文、お禮參り、及び寺院祭禮等に於ける女子の風等を含む)

十五　尼、巫女、妾等となる婦人
(土地の婦女多き乎他所のもの多きか、貧窮の爲か風習の爲か、又は醜業者より轉ずるもの多きか等)

十六　女子の言葉に關する特別の氣付き

十七　女先生、女先達、又は有力者にして、其地方の婦女子を感化するもの並に其姓名小傳

十八　婦女子に關する有名の古跡、古碑、並に其小史

十九　婦女子他國への出稼の有無、增減、行先(何地方に多く行くやの事)及歸宅後の狀態

二十　密賣者及び藝娼妓の稱呼並に此等に對する憎惡の輕重
(醜業に對する勸誘の嫌ひあらざる乎、醜業者に對する特別の嫉の有無等を含む)

◎寄答者への注意

一　紙上に記載を要せらるゝ仁は別に本名及び住所を添られたし

一　寄答の原稿を女學雜誌女學欄に揭載したる時は、寄答者に該號の雜誌三部を進呈す

一　報告寄送は凡て左の名宛たるべし

東京麴町區下六番町六番地
櫻井鷗村

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

（四六二）

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY